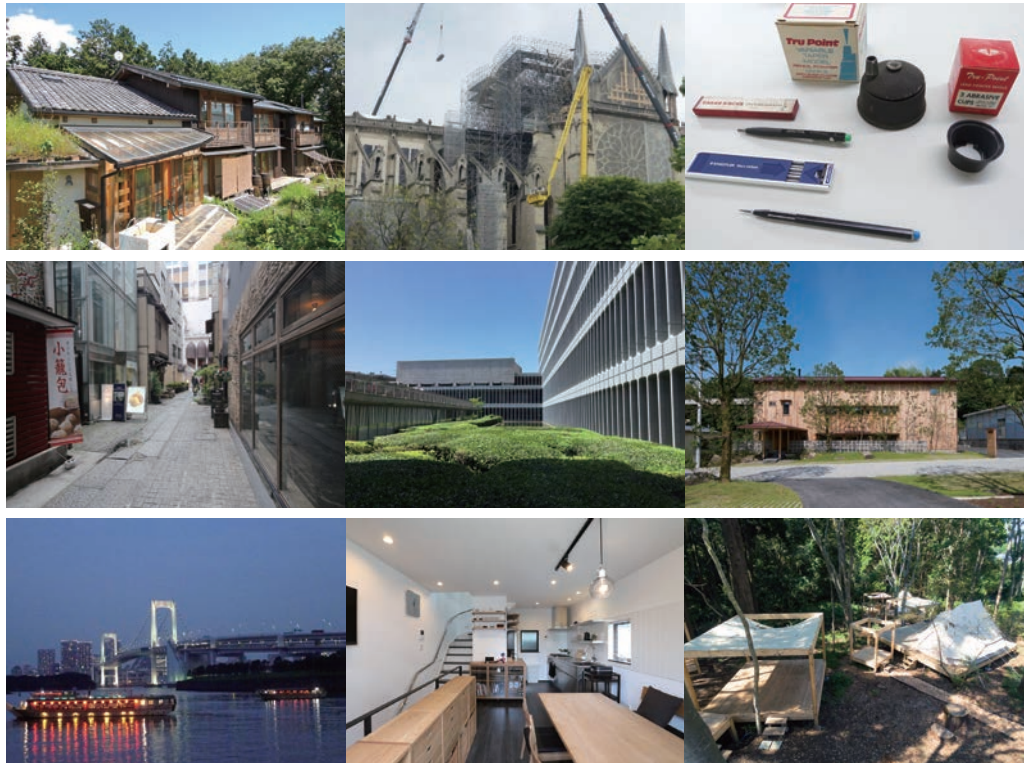


Bulletin 282

2020 冬号



COLONNADE

特集：「住」について考える 第2弾 都市と地域、住まいかたの多様性
第3回 JIA 神奈川建築フォーラム／連載：日本の建築界におけるSDGs／東海支部

FORUM

海外レポート／覗いてみました他人の流儀／温故知新／日本版CABEを考える
JIAで公共空間の使い方を提案する／未来へ継承したい風景／建築写真について／活動報告／わたしの愛用ツール



窓と換気のハイブリッド「DI窓」で 高断熱を実現し住宅の省エネに貢献

三協立山(株) 三協アルミ社は、玄関ドアや窓などの住宅建材や、ビル建材、エクステリア建材を開発・製造・販売しています。今回紹介する「DI(ダイナミックインシュレーション)窓」は、空気を動かすことによって窓の断熱性能を高める、新たな発想・技術を用いたシステムです。これまで環境省やNEDOの助成を受けて研究を進め、2018年度にはこの研究開発に対して地球温暖化防止活動環境大臣表彰を受賞。今年5月、集合住宅向けに販売を開始し、市場開拓と普及を目指します。「DI窓」の仕組みやメリットについて、研究開発を担当された大浦 豊氏にうかがいました。

外気を循環させて 窓から逃げる熱を室内に戻す

国が普及を進めるZEHなど、住宅はさらなる断熱化が求められ、とくに断熱性能の低い開口部の断熱は私たちの課題です。ダイナミックインシュレーション(DI)という技術は、一部壁では用いられていますが、窓ではまだ実用化されていないため、この技術を使った高性能な窓をつくるために、私たちは研究開発を進めてきました。

DI窓は、外窓と内窓の2重窓で構成され、それぞれの上部にスリット状の換気口があり、2重窓の中間層にブラインド、もしくは上部150mmくらいに整流板と呼んでいる板を取り付けることで成り立ちます。24時間換気が稼働すると窓の中に気流が生まれ、その動きの中で断熱を取る仕組みです。

原理は極めて簡単です。冬に外が0°Cで室内が20°Cの場合、2重窓の中間層では、外窓上部の換気口から入った冷気がコールドドラフトといって何もしなくても外窓のガラスに沿って降りてくる流れができます。一方、内窓側は室内が温かいので上昇流が起り、降下した外気も暖められ上昇します。DI窓はその力をそのまま使うだけ。

ただし、上に上がった温かい空気が冷気と混ざってもう一度回らないように、中間層の上部を仕切って温かい空気を室内に取り入れます。中間層はブラインドで仕切った方が性能がよいのですが、眺望や寸法の面から、上部だけ整流板で仕切る方法もあります。

DI窓の4つのメリット

従来2重窓には断熱遮熱効果、防音効果、結露軽減効果、防犯効果がありますが、DI窓にはさらに大きく4つのメリットがあります。

①断熱性能が飛躍的に向上

通常の窓と比べて、整流板タイプでおよそ7倍、ブラインドタイプでおよそ10倍断熱性能がアップし、住宅の省エネに繋がります。

②外気を温めて室内に取り入れる

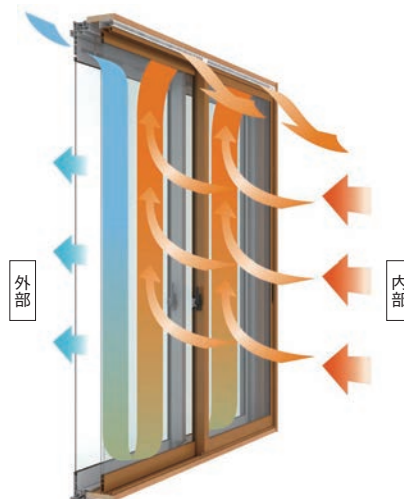
通常、壁の換気口から取り入れた外気は冷たいままですが、DI窓は、室内が20°Cの場合、0°Cの外気が12°Cから14°Cまで上昇して室内に入ってきます。ですから外からの空気が冷たく感じず、換気による不快感をなくすことができます。

③給気口不要で建物の外観向上

DI窓は給気を換気^{かま}ちから行うため、外壁の給気口や換気口などベントキャップが不要になり、住宅の外観を向上します。壁に穴を開けないことで躯体の耐久性の向上にも繋がります。

④空気の循環で結露を減らす

冬寒いときに、マンションでは換気口を閉めたり、換気扇を止めてしまうこともあるでしょう。しかしそうすると内部の湿度が高まり、結露してカビ



DI(ダイナミックインシュレーション)窓の仕組み

が発生してしまいます。DI窓は常に空気が流れているため結露を防ぎます。

リノベーション時に 高付加価値な2重窓を

DI窓は壁よりも断熱性能が高いため、エネルギーロスの心配なく窓を大きく配置することができます。また、今後マンションの改修はいつそう増えるでしょう。DI窓を使用することで、家全体の断熱性能を高めることができます。マンションによって窓のタイプも改修可能範囲も異なるため、外窓を触らずにDI窓化する方法など、さまざまなケースに対応するよう、今後も開発を進めてまいります。



CONTENTS

COLONNADE

- 4 特集：「住」について考える
第2弾 都市と地域、住まいかたの多様性
- 5 里山長屋暮らし ビオフォルム環境デザイン室 山田貴宏
- 6 移住を通して新たな循環を知る ―千葉・館山を生活拠点にエコハウス建設に注力―
ルートエー 高木 俊
- 7 「暮らしを建てる」ことで地域に貢献する ―住み継がれる家とはなにか?― ベガハウス 大迫 学
- 8 多拠点移動が設計エネルギーに繋がる ―和歌山・長野、二地域居住の楽しみ―
アトリエ・アースワーク 山下和希
- 9 生活と場所 ―私たちは住む場所を選べるのか?― 駒田建築設計事務所/前橋工科大学 駒田剛司
- 10 第3回 JIA 神奈川建築フォーラム (第4回学校研究会+展示)
「地域とともにある学校」―サステナブルで豊かな暮らしに向けて― 田井勝馬建築設計工房 田井勝馬
- 12 連載：日本の建築界における SDGs 第2回
SDGsと建築家 ―国際会議 JIA IPF 2019 in Hirosakiから― 東京都市大学名誉教授/岩村アトリエ 岩村和夫
- 14 東海支部 東海支部会報誌『ARCHITECT』発行継続を巡って (前編) 堀内建築研究所 中澤賢一

FORUM

- 16 海外レポート バリの街中工事事情 ―ノートルダムの再建工事をきっかけに改めて考える「再生され続ける街」―
SFA Japan 荻野雄仁
- 18 覗いてみました他人の流儀 吉里裕也氏に聞く 都市とローカル、人を動かす手段を考える
Bulletin 編集WG
- 20 温故知新 30年間 彦根建築設計事務所 彦根アンドレア
- 21 抱負を語る 「極小」から住宅・都市を考える クラムハウス 笠井誉仁
抱負を語る 絵を描くように 長谷川拓也建築デザイン 長谷川拓也
- 22 日本版CABEを考える 地域会の活動を通してまちづくりの問題点を探る Studio PRANA 林 美樹
- 23 連載：JIAで公共空間の使い方を提案する 第2回
ノマディック・ルーフを港湾緑地へ ―構想から完成まで― 小山将史建築設計事務所 小山将史
- 24 連載：未来へ継承したい風景 第2回
魅力ある地域の遺産 ―目黒区エリアの景観・歴史・環境遺産― タオアーキテクト 木村丈夫
- 26 連載：建築写真について 4 築地・銀座周辺まち歩き (後編) 建築家写真倶楽部
- 28 活動報告 交流委員会Eグループ 時代の節目 きんでん 若佐明継
- 29 交流委員会Gグループ 意匠設計事務所のBIM活用事例の見学 建築ピボット 井出哲也
- 30 わたしの愛用ツール 100円眼鏡/ CARAN D'ACHEのFIXPENCIL/アプリ「大江戸今昔めぐり」

BACKYARD

- 31 ひといき 大阪通天閣のおひざ元にある不思議な空間 松本金弥建築計画事務所 松本金弥
- 31 編集後記
- 2 パートナーズアイ 三協立山株式会社 三協アルミ社
窓と換気の高ブリッド「DI窓」で高断熱を実現し住宅の省エネに貢献

第2弾

都市と地域、住まいかたの多様性

はじめに

公益社団法人日本建築家協会関東甲信越支部の広報誌である『Bulletin』は、現在、特集や連載など、オリジナルの記事を中心に構成した冊子づくりを目指しています。さらに、今年度から特集に関して年間テーマを設け、数号にわたって楽しんでいただけるかたちを検討しています。

今年度は、建築の根源的なテーマである「住」にスポットを当て、秋号、冬号、春号と特集していきます。建築家の取り組み、社会的な風潮、第三者的な視点などの観点から、「住」について改めて考えてみたいと思っています。

今号：「都市と地域、住まいかたの多様性を考える」について

冬号の特集テーマは「都市と地域、住まいかたの多様性を考える」です。

国内全体で人口が減少している今、すべての地域で定住人口を増やすことは非常に難しい状況です。そのようななか、国土交通省では「二地域居住」を積極的に推進しています。相変わらず人口は都市部に集中していますが、以前に比べると都市でないことができず、地方や地域ならではの取り組みが活発に行われ、多様な価値・魅力を含んだライフスタイルが形成されつつあります。

「ローカル」という言葉自体も、ポジティブな表現として世の中に定着してきました。地方に限らず、都心でも小さなコミュニティはローカルとして語られ、魅力が再発見されて新たな賑わいを見せている場所も多く、人と人が関わることで生まれる熱量には人を惹きつける力があることは確かです。

今回の特集では、場所と密接に関わりながら、仕事や日々の生活を楽しみ、また奮闘しておられる方々を紹介します。1人1ページなので深く詳細にはいきませんが、それぞれのライフスタイルや設計活動をされる上での考えを通して、多様化する「住まいかた」やその魅力を、改めて皆さんに感じていただければと思います。

(『Bulletin』編集長 長澤徹)



里山長屋暮らし

1966年千葉県出身。1990年早稲田大学理工学部建築学科卒業。1992年同都市環境工学専修修了。1992～1999年清水建設株式会社。1999～2005年長谷川敬アトリエ。2005年～ビオフォルム環境デザイン室。日本大学生物資源科学部非常勤講師、早稲田大学建築学科非常勤講師を歴任。

ビオフォルム環境デザイン室
山田貴宏



現代は大きな変化の時代にあります。日本においては縮小する人口、経済の課題が浮き彫りになってきていますし、世界的には環境問題が気候変動を含めていよいよ喫緊の課題となってきました。私たちは半ば茫然自失であります。そうした中、自分たちの足元からの暮らし方を見直す方法論が求められています。何らかのパラダイムシフトが必要なのです。

筆者は「パーマカルチャー」というデザイン手法の普及啓発にここ20年ほど関わってきています。オーストラリアのビル＝モリソンという生態学者が、環境問題が顕在化してきた1970年代に提案した、生態系の仕組みを基本とした暮らしのあらゆる面におけるデザイン的手法です。私たちがこれからも健康的に生存していくための基本的な仕組みをもう一度取り戻そう、というわけです。水、エネルギー、建築、物質循環、地域経済、健康的なコミュニティ等々私たちの周りの仕組みを包括的に捉え、解決していくことが必要で、その思想や手法を背景に、筆者は建築の設計活動をしています。

そうした試みの一つとして、2011年1月に、設計を担当した「里山長屋」というプロジェクトが竣工しました。場所は神奈川県相模原市。かつては津久井郡藤野町だった自然豊かな山間地域です。自然と人が折り合いをつけながらその豊かな恩恵を受ける場所としての「里山」。いわば、自然と人の良き関係を象徴する場所です。また、隣人や地域との健康的な関係性を象徴する言葉としての「長屋」。これらを組み合わせた暮らしの場をイメージして、「里山長屋」という4戸＋コモンハウスを持つ長屋住宅をつくったのです。自然が持つ豊かさを存分に住まいに取り入れるパッシブな考え方で、かつ、隣人ともつながりながら安心感のある暮らしを模索したプロジェクトでした。自然は「小さなよき関係」がたくさん、多様に繋がり合うことでその安定性を担保しています。大きな仕掛けではなく、小さいいい関係性を自然とも隣人や地域とも繋いでいくことで、環境にも負荷をかけず、安心した暮らしを実現していこう、というわけです。

4戸の家族が集まって、コーポラティブ方式で作り

ました。設計を担当する過程で、筆者もその仲間に加わることとなり、それまで培ってきたパーマカルチャー的なデザインの方法論を存分に設計の上で試す機会となったのです。完成後の住まい方としては、プライベート空間とコモン空間が共存する、いわばコレクティブハウジング形式を模索しました。

もう一つ特徴的なのは、この長屋住宅を伝統的な構法である、木組み＋竹小舞土壁でつくったことです。伝統的なつくり方は、長年その気候風土で培われた、いわばそれだけでもエコロジカルな住まい、と断言していいと思いますが、現代の省エネ性や温熱環境を重視する住まいのレベルからすると、ちょっと弱い部分があります。筆者は伝統と現代の環境制御技術をうまく組み合わせながら、次の時代の民家をつくっていけないだろうか、と考えています。土壁は調湿だけでなく、うまく外断熱をしてあげると蓄熱性能も発揮してくれます。室内の温熱環境を計測すると、冬場はダイレクトゲインによる蓄熱性を、夏場はナイトパージによる蓄冷性を発揮していて、比較的マイルドな温熱環境を形成していることがわかりました。

また、土壁づくりは職人だけではなく、多くの方がワークショップで参加できる余地があります。里山長屋では一夏をかけて、延べ300人以上の一般の方に参加してもらい、土壁づくりを体験しました。現代の「^{ゆい}結」のあり方の模索です。材はできるだけ地元の杉、檜を使い、地元の大工さんと二人三脚でつくりました。こうした諸々の小さな関係性を多様につくっていくことで、総合的なエコロジカルな住まいの状況をつくれると考えています。

こうした甲斐もあり、現在住んでいる4家族とも、比較的ローエネルギーで、かつ、気心の知れた隣人がいる



安心感の中で暮らしています。

「里山長屋」外観
(2016年度第17回JIA環境建築賞住宅部門優秀賞 受賞)

移住を通して新たな循環を知る

—千葉・館山を生活拠点にエコハウス建設に注力—

1974年埼玉県生まれ。
1998年東京理科大学工学部建築学科卒業。アトリエ・ワンに勤務。2006年に独立。
2010年ルートエー株式会社を設立。2012年千葉県館山に移住、現在に至る。

ルートエー
高木 俊



台風15号で自宅テラス屋根が被害

やっぱり固定があまかったか……。9月9日(月)早朝、台風15号の風で自主施工のテラス屋根が飛んだ。家族が寝静まる中、辺りを見回った。破損や断線、倒木はあるものの、想定内として道路に出た。わが家は集落の共同墓地を過ぎるほど人里離れている。車が通れさえすればと思ったのもつかの間、墓地から道路を塞ぐソーラーパネルの列が望めた。その先でも倒木が高圧線を切断していた。わが家の先には、9軒の高齢者が暮らしている。事態をSNSに投稿すると、すぐに仲間が駆けつけてくれた。ここは自警団よろしくソーラーパネル群を道路傍らに寄せ、倒木を除去し、日没頃には車が通れるまでになった。

2日目、進行中の工事現場が心配で確認に向かった。途中渋滞で車が動かなくなる。迂回して現場に着くと、渋滞の原因がガソリンスタンドだと知った。営業中のスタンドに車が殺到したわけだ。現場の無事に安堵した帰路で見た漁村の有様に、自分たちは被災していると認めた。

温暖で都心へのアクセスが良いのにド田舎が残る館山。ここに惚れて11年、暮らしながら風土や歴史を学んできたが、台風直撃には誰もが不用意だった。冬場に吹き荒ぶ大西(西からの強風)に耐えていることで慢心があったのかもしれない。

週末の田舎暮らしからスタートし、家族で移住

子育て、介護など田舎暮らしの理由はいくつかある。ただ土地の決め手になったのは原野への憧れだった。周囲を気にせずのびのびと暮らしたい！でも山を切り開くほどの勇気もない。そんなときに出会った1,100坪の敷地は、かつて祈祷師が暮らしていた。彼が築いた家屋、温室、果樹、畑などを引き継ぎながら暮らすイメージが湧き即購入。週末ごとに通ってこの建物をどう料理しようかと夢を膨らませた。ちなみに家屋は倉庫を含めると平屋5棟、延べ211㎡で、東西1列に並んでいる。諸室は信者や患者用の長期滞在型個室で住むには使い勝手がよくなかった。それもリフォーム心に火をつけた。しかし、楽しい時間は1年も経つと自然の力に圧倒されてくる。雑草の成長と除草作業時間が釣り合わない。手を付けてな

い場所が増え続けて、本当に原野に戻ってしまうと思った5年目、子どもの入園を機に生活拠点を館山に移した。

最初は新奇な目で見られていたはずだ。しかし、ある日、子どもの送迎ですれ違うお母さんにもどこか所在なさを感じた。なるほど彼女たちもここの暮らしは初めてなんだ！とするとどの家庭にも移住者がいることになる。そう気付いたら楽になれた。

移住先での設計活動

移住して3年も過ぎると一気にネットワークが広がった。なかでも鴨川にあるパーマカルチャーガーデンでのエコハウス建設は、わが家の暮らしと仕事に多大な影響を与えている。建坪は20坪、ローコスト、DIY、オフグリッド、ゼロエミッションでいて寒くないことが前提。食べたものがコンポストトイレを介して、いつかまたサラダや鴨肉となって食卓に戻る循環をデザインしている。現場では初心者でも同じ作業ができるかが問われ、材の寸法や道具の選択には熟慮した。材料調達もユニークだ。断熱材はサイロへ取りに行く。床下に籾殻を敷き込んでいると米の香りで何を作っているのか分からなくなった。それからというものの周囲が室の山に見える！

現在進行中の住宅は、要らなくなった石をかき集め、放置された杉や桧を間伐し、休耕田から粘土を頂戴してつくっている。重いものには無理をせず人手で対応し、新たな出会いと共感を生む場となっている。

台風による屋根のブルーシートは、職人不足で2～3年は残ると言われている。ここは都会にもネットワークを持つ二地域居住者の出番ではないか！出張がたらに太平洋を眺め魚介を食べて元気になってもらえたら嬉しい。新たな人の循環が見えてきた。



エコハウス床下に籾殻を敷き込む。後ろにはソーラーパネルが見える。

「暮らしを建てる」ことで地域に貢献する

— 住み継がれる家とはなにか？ —

1974年鹿児島県鹿児島市生まれ。
1995年北九州ポリテクカレッジ卒業。ゼネコン現場監督3年、設計事務所3年を経て、ベガハウスに入社。
2019年ベガハウス一級建築事務所 代表取締役社長就任。一級建築士、一級施工管理技士。

ベガハウス
大迫 学



鹿児島を拠点とした木造住宅の工務店

私たちのチーム(会社)は鹿児島を拠点に木造住宅の設計施工を行っています。「地方では住宅は設計事務所ではなく大工に頼むという風土」と思われている方も多いかもかもしれませんが、実際はそう単純ではありません。一般の方は、誰に頼んで、どんな順番で家を建てたら良いのか分からないのです。

都市部では、設計事務所の物件は雑誌を含めメディアに出る機会が地方より圧倒的に多いと思います。それに比べ、鹿児島はメディアから取材されにくい環境で、そもそもメディアの数も少ないという実情があります。なので、設計事務所の物件を一般の方が目にする機会が少ない。だから家を建てようと思っても設計事務所に頼むという選択肢がそもそもないのではないのでしょうか。

ハウスメーカーや私たち工務店は、都市部だろうが地方だろうが一般の方に知ってもらうための行動を常にしています。常設展示場、個別のモデルハウス、見学会、ホームページのSEO対策、SNSの活用等々必死です。私は前職は設計事務所に勤務していましたが、設計事務所と工務店の一番のギャップは、設計内容ではなく、一般の方に自分たちを「知ってもらうための行動」の意識の差であるように感じています。

住み継ぎたいと思える家づくり

私の会社は、顧客の成熟した要望を活かし、そうでない要望は、その深層にある欲求を見極め、新たに提案することをポリシーとしています。そのためには、特に地方(鹿児島)においては、その生産性を考えると設計施工がベストではないかと考えています。

私たちが目指すもの、それは「暮らしを建てる」です。どんな家を建てるかではなく、どんな暮らしを育むか。一人ひとりの暮らしを建てるのが、私たちの仕事だと考えます。将来売却することを前提にした家づくりではなく、できるだけ後世に受け継いでもらえる。いえ、受け継ぎたいと思える家にしたいと思っていますのです。

鹿児島は、高齢化・人口減少・人口流出等々の住宅事情にも関わる大きな問題を抱えています。このような

地域に「性能だけが優れている住宅」だけをつくっても、これらの問題解決にはなりません。将来そのような家が空き家として残るだけです。なので性能の良さにプラスして、「この家に住みたいから、ここ(鹿児島)を生活の拠点として考える」という潮流を作り、この家を後世に残したいという思いを、時間をかけて染み込ませなければなりません。

学び、教え、つながり合う「ものづくりの木造校舎」

ベガハウスの社屋は鹿児島市石谷町にあります。2016年6月に自然豊かなこの地域に移ってきました。新社屋ができたことにより、以前にも増してより風通しの良い職場環境になりました。全スタッフが何をしているか見渡せますし、ふとした瞬間に緑が目に入る環境もまた心地良いものです。

また小規模ではありますが木材加工場も持っています。なのでモックアップを作り、手で確かめることもより身近になりました。近隣に住宅もないので、日曜日や祭日、早朝でも、電動工具を使っても苦情もきません。

スタッフは県外からも多く集まってきています。志望の動機を聞くと、みんな「可能性を感じたから」と言います。会社の規模として拡大路線に向かおうとは思いませんが、スタッフの求める「可能性」は常に拡大していきたいと思っています。

私たちの目指すものが、地域に対して正しいことなのか？ 明確な「答え」はありません。ですが、「答えを模索する道」こそが大切だと思っています。その模索する道が、新しい地域の魅力創造につながるのではないのでしょうか。



ベガハウス社屋。新しい工務店のあり方を考え、木造校舎のような社屋とした

多拠点移動が設計エネルギーに繋がる

—和歌山・長野、二地域居住の楽しみ—

1959年和歌山県有田市生まれ。1982年早稲田大学専門学校産業技術専門課程建築設計科卒業。1982～96年株式会社 富松建築設計事務所勤務。1997年アトリエ・アースワーク設立(和歌山office)。2011年安曇野office開設。現在2つの地域を拠点に、医療・福祉施設、店舗、住宅・別荘などを設計している。

アトリエ・アースワーク
山下和希



建築家として自邸を実現させる夢を抱く

誰しも一度はマイホームを建てようと思うだろう。日頃から設計業務に携わる建築家も、時期は異なれ「そろそろMy Homeを建てる」と思い立つ時期が必ず訪れるものである。私も同様、今から振り返れば自邸を建てた思い立った時が二地域居住の始まりだった。

和歌山県に生まれ、その場所を仕事の範囲と決め活動していた。就職先の事務所からはいつもお城が綺麗に見えていた。目標は、お城(紀州徳川家・和歌山城)の側に、住まい+事務所を建てることだった。いつもお城を眺めながら大勢のスタッフと一緒に仕事ができる、そういう環境を求めた。年齢的には大変遅かったが、その時が私にもやって来た。希望に向けて1年間土地を探した結果、私でも購入できそうな場所が見つかる。ただし、狭小地に加え、中心市街地であるが故に中規模建築群が周辺を取り囲み、計画建物を少し高くしなければお城が見えない状況と判断し、エスキースを始めたのである。

仕事の合間に夢を膨らませ、試行錯誤を繰り返すこと6案目の頃、今まで進めてきた内容に疑問を抱く。お城が見えることを第一の条件とし、家族構成も考慮の上に居室を設け、さらに事務所スペースを最上階に設けることが果たしてこの建物をつくる正しい答えなのか……。

安曇野市への旅行が人生の転機となる

1年に2～3度家族で旅行していた。生まれ育った和歌山県は、海・山から成る景勝地に恵まれ、環境も素晴らしいのだが、なかなか子どもたちに自然と戯れ、やりたい放題で遊ばせることが難しい地形なのである。それで出かけた先が長野県中信地区・安曇野限界だった。

日頃、自然の中で遊ばせる機会が少ない子どもたちも大喜びで野山を駆け回り、溪谷のせせらぎにて水遊びができる素晴らしい環境が揃っていた。西には雄大な北アルプスを控え、日没まで時間を忘れ遊んだ。それに加え、朝食に出される新鮮な野菜には驚かされた。決して高価なホテルではない公共の宿でも、宿泊者におもてなしができる食材が豊富であることが、この街に惚れ込んだ決定打かもしれない。

不思議なことが起こるのはその後である。自邸の話なのだが、1年以上かけて基本設計を進めるもなぜか納得がいけない時期だった。まさしくその頃同時に、毎年遊びに行く長野県の土地環境と価格の看板が目止まり始める。旅を終え、和歌山に戻り自邸設計を相変わらず仕事の合間に進めていたが、1年後に再度安曇野旅行に向かうとこの場所の素晴らしさを再認識する。さらに不動産の情報になり出し、最終的には「私の仕事は和歌山県だけでなくとも拠点は何処に置いてもできるのでは」と感じ始めたのである。

家族で話し合い出した結論が「移住」。それも和歌山から500km離れた縁もゆかりもない長野県安曇野市だった。早速、リビングから北アルプスが綺麗に眺められる場所に限定し、不動産巡りを始める。その頃、仕事につながる案件も生まれ、自邸づくりと同時に安曇野市で住宅の設計を受注できた。和歌山ではなかなか進まなかった土地探しと設計も順調に進み、また地元住宅案件も無事に着手できるなど、不思議な出来事が続いた。

二地域居住の楽しさ —和歌山・長野・東京で活動—

現在住まいを安曇野市に設け、生まれ育った和歌山県に向かうことが多くある。育まれた地元愛により、移住した後の今も事務所の拠点は残している。それに加え、長野に暮らすことでご縁をいただいたNPO法人家づくりの会の事務局がある東京でも活動をしている。移動手段(公共交通機関またはマイカー)を替え毎週のように次の街へと移動する。体力と時間に関して言うなれば大変であることは事実。スケジュール管理にはいつも悩まされる。

しかし移動することで多くの人との出会いがあり、日頃気づかないその場所ごとにある街の風景や季節感を得られるのである。道中出会う名建築や名所旧跡を訪れるのがいちばんの楽しみ。少し遠回りをしながらも地方の街を訪問する。これが自分の活動のエネルギーとなり、新しくでき上がるプロジェクトに結び付くのである。

大切にしていることは、行き先で待っていてくれる人であり、進行中のプロジェクトの経過である。これからもさらにエリアを広げ、多地域居住を楽しみたい!

生活と場所

—私たちは住む場所を選べるのか?—

1965年神奈川県生まれ。1984年立教英国学院卒業。1989年東京大学工学部建築学科卒業。香山壽夫建築研究所。1995年東京大学工学系研究科 建築学専攻助手。2000年(株)駒田建築設計事務所共同設立。現在、前橋工科大学工学部総合デザイン工学科教授。

駒田建築設計事務所
前橋工科大学
駒田剛司



「西葛西APARTMENTS-2」*が竣工してほぼ1年。幸いなことに、私たちの取り組みについて多くの方々が関心を寄せてくださいます。賃貸住居とオープンスペースやペーカリー、コミュニティ活動とコワーキングスペース、私たちの設計事務所、それらの活動を支える建築について、さまざまな機会でお話をさせていただきました。今回、「都市と地域、住まい方の多様性を考える」というテーマに対して、「場所と生活」の結びつきが、何を前提としたときに私たちにとってリアルな問題となり得るのか、ということにいて、いつもとは少し違った観点からお話をしたいと思います。

私たちは自分の生活する場所を能動的に選ぶことができる、と考えることが多いと思います。しかし本当にそうでしょうか？ どの時代でも生活基盤を自由に移動できるのは、ある階層以上の人々に限られています。近代以降、世界中で多くの人口が都市へ集中しました。世界的に見ればその動きは今も衰えていません。しかしそれは、地方や農村部での生活がままならなくなり、より豊かな生活を享受できるかに見える都市部への、いわば選択肢のない移動であり、同時に都市の拡大に従って必要となる、安価な労働力の調達に迫られる、経済資本の都合でもあります。ミクロな視点で見ると、生活基盤の移動にはさまざまなコストが必要です。引っ越し代、家財の新調や処分にかかる費用はもちろんのこと、それまで培ってきた地域社会とのつながり、ご近所付き合いから、買い物先、学校、職場、病院などなど。そうしたソーシャルキャピタルをいったんチャラにしなければならない。つまり、当たり前のことですが、「能動的で自由な生活基盤の移動」は、移動によるコストとメリットの収支が、釣り合った場合のみ成立するのです。それが可能なのは、コストを十分に賄える層か、身軽でソーシャルキャピタルに頼らない層か、いずれにしても一部の人々に限定される。いわゆるニューリッチが家族や子供を丸ごと海外へ送り込んだり、昨今話題のアドレスホッパーが居場所を転々としたりするのがその典型です。

一方、「受動的で選択肢のない移動」を強いられる層は

多く存在します。地方から都市へ向かう人口はもとより、世界中で急増している移民をカウントすれば、圧倒的な数に上るでしょう。転勤や就職といった事情による移動もこの中に含まれます。欧米の大都市周辺で顕著になっている、家賃をはじめとした生活コストの急激な上昇によって、住む場所を追われるかつての中間層もその一部です。持ち家を購入するといった行為ですら、家族、就労、教育、所得などさまざまな要因によって厳しく条件付けられ、能動性と選択性は極めて限定されているのが実情です。

いささか前置きが長くなりましたが、お伝えしたいのは「私たちに生活の場所を選ぶ然したる自由はない」という事実です。しかし、自由が抑圧されていることをことさらに強調したいわけではありません。何故なら、私たちは「私たちに生活の場所を選ぶ然したる自由はない」ことに諦観してこそ、「場所と生活」といった概念を自分ごととして初めて内面化できると考えているからです。加えて言えば、それはまた「受動的で選択肢のない移動」が最小限に抑えられる社会基盤の形成に私たちがコミットする契機にもなる。

さて、「自分たちの街は自分たちで変える」。西葛西のプロジェクトを始めたきっかけとして必ず紹介している言葉です。言うまでもありませんが、この決意表明は「私たちは西葛西から移動することはできない」という前提なしには成立しません。移動が可能なら、魅力的な場所へ移り住むまでですから。人々があたかも商品を選ぶように住む場所を選んでいる限りは、その場所へのコミットメントは期待できません。私たちは交換可能性のないものに感情を傾け、関心を深める。この原則は住む場所にも適用されます。が、それはあくまで必要条件です。場所に魅力があり、その魅力形成にコミットする機会が時間的、空間的に与えられてこそ必要十分な条件が揃う。「西葛西APARTMENTS-2」が目指しているのは、そうした場を、この場に関わる人々と手を携えて創り上げていくことなのです。

* www.komada-archi.info 参照

第3回 JIA 神奈川建築フォーラム

〈第4回学校研究会+展示〉

テーマ

「地域とともにある学校」

—サステナブルで豊かな暮らしに向けて—

日程：2019年11月10日(日) 場所：横浜・象の鼻テラス



神奈川地域会
副代表
田井勝馬

「第3回 JIA 神奈川建築フォーラム」と題して、昨年に引き続き横浜・象の鼻テラスにおいて、シンポジウムが開催された。当日は横浜マラソンと同日開催となったが、建築関係者をはじめ、学校関係者、地域街づくり関係者等を含め、一般の方々も参加された。

はじめに、JIA 神奈川の小泉雅生代表より、今回のシンポジウムのテーマ「地域とともにある学校—サステナブルで豊かな暮らしに向けて—」の趣旨として、持続可能な社会を目指す中、地域の再活性化も大切なテーマであり、その地域の核となる学校は重要な役割を担っている。学校と地域連携についての課題と可能性について議論をしたいと説明があった。

第1部 シンポジウム

第1部は、地域と学校について研究や活動をされている、堀井啓幸氏(常葉大学教育学部教授)、岸裕司氏(秋津コミュニティ顧問)、横山俊祐氏(大阪市立大学大学院工学研究科教授)を迎え、各登壇者から今回のテーマに沿ったレクチャーをしていただいた。司会は JIA 神奈川の柳澤潤が務めた。

地域とともにある学校とコミュニティ・スクール/堀井啓幸氏

堀井氏からは、「地域とともにある学校とコミュニティ・スクール」と題して、教育経営学の視点から学校と地域連携としてのコミュニティ・スクールのあり方について話していただいた。

近年コミュニティ・スクールが激的に増えている現状とその背景の説明。また学校運営協議会設置の義務化等のガバナンス改革が行われ、「開かれた学校」への道筋が付けられた趣旨説明。そして三鷹市立第四小学校の実例をもとに、「開かれた学校」をキーワードとして、学校支援ボランティアを導入したきっかけとガバナンス改革のポイントについて説明された。そしてこれからの新しい学校のためには、学社連携・協力の必要性についても説かれた。

秋津コミュニティでの実践の秘訣/岸裕司氏

岸氏からは、「秋津コミュニティでの実践の秘訣」と題

して、地域住民の立ち位置でお話いただいた。

コミュニティ・スクールとは学校運営改革であり、学校が使われていない155日/年を地域住民の多機能施設として利用する複合化がコミュニティ・スクールである。それは住民自治と地域教育の場として、保護者と地域住民に与えられた画期的な法制度でもある。

またその実践として秋津小学校の例を挙げ、地域住民の持っている意欲とスキルを学校に還元するといった地域ボランティアの精神こそが秋津の試みであり、学校と社会(地域住民)の学社融合こそ、学校教育と社会教育の相互メリットを引き出せるスクール・コミュニティであると力説された。

地域と連携した学校建築/横山俊祐氏

横山氏からは、「地域と連携した学校建築」と題して、実際の建築目線に立って具体例を紹介していただいた。

まず地域と連携した開かれた学校の建築手法として、①空間的・視覚的な連続性→塀のない学校、視覚的に開かれた学校づくり、②学校施設の地域利用→学校開放による地域利用、街並み景観の形成、③地域交流の場の確保→地域交流センター、空き教室の利用、学童保育、④学校施設と地域施設の複合化→学社融合、デイサービス、保育所、⑤学校施設の再利用→廃校活用、地域の博物館等、実例の図面と活動写真をもとに建築目線で具体的な説明がされた。

また一方で、学校づくりの効果として、学校の取り組みが地域人口を増やすことになった御所南小学校の事例をはじめ、計画づくりから住民参加型の取り組み等、学校と地域の連携(学社連携)こそ楽しい学校づくりができるのではないかと説かれた。

第2部 パネルディスカッション

第2部は、さらに焦点を絞って各登壇者に司会者より意見をうかがった。

堀井氏には、制度としてのガバナンス改革について、三鷹市立第四小学校を例に「地域が主体となって学校を支える」教育ボランティア制度の大切さと、地域住民と



小泉雅生代表よりフォーラムの趣旨説明



堀井啓幸氏よりレクチャーの様子



岸裕司氏よりレクチャーの様子



横山俊祐氏よりレクチャーの様子



第1部 シンポジウムの様子



会場からの質問風景

しても生涯学習として地域教育に参画していくことが地域づくりにつながっていくことを説明していただいた。

岸氏からは、格差社会における学校教育において、スクール・コミュニティの大切さを改めてうかがった。学校の実質82%の空き時間を地域時間として活用する学校の複合化こそ、地域住民が子どもを見守り・育てる「地域とともにある学校」の本質ではないか？ なぜなら、「学校建築は住民の資産であり、子どもは地域の宝・社会の宝である」との含蓄のある言葉に合点がいった。

横山氏からは、建築家として学校を開くことによる境界のあり方、特にセキュリティ面においてどのように対応していくかの問いに対し、基本ハードは開いておいて、ソフト面については各地域と学校の考え方から決めるべきであり、各地域の特性を計画段階にて話し合う姿勢と仕組みが最も大切ではないかと柔軟な意見をいただいた。

今回、シンポジウムを通して建築関係者はじめ、学校関係者や街づくり関係者の多くの方々からさまざまな質問や意見が出された。そしてその中から、これからの学校建築の課題と可能性についてのヒントが抽出された気がする。その中において各登壇者からの「誰のための学校なのか」「学校は市民の資産」「学校づくりは地域づく

り」という言葉が脳裏に焼き付いている。また地域コミュニティが崩壊している地域も散見している状況において、10年先、20年先に繋がる持続可能な地域住民システムの構築は喫緊の課題でもあり、地域で子どもを育てる学社融合・連携の取り組みは、PTA改革にもメスを入れた地域住民の意識改革が重要。

またその一方で、学校建築の複合化について運営システムも含めた課題が山積していて、地域住民と一体となった運営システムの構築など、市民と行政を巻き込んだ議論が必須である。なぜなら、地域の方々の意見や強い意識があれば、行政を動かす言動力となるからである。それには建築関係者や学校関係者だけではなく、教育関係者はじめ多方面の方々が集まってこの議論を交わし、これからの学校建築のあり方を語る事が最重要である。

今回、第3回 建築フォーラム「地域とともにある学校」というテーマにおいて皆様からいただいた多くの提言は、今後地域を変える、社会を変える大きなテーマになると確信している。今回建築家として、また一地域人として、そして一親として、考えさせられた有意義なシンポジウムであったと思う。

そしてJIA 神奈川では、今後もこのテーマを学校建築研究会という形において、引き続き議論を重ねていきたいと思う。

前号から3回にわたり、「SDGs」について連載しています。今回は、JIA建築家大会2019青森での海外建築家協会会長による国際会議(IPF)を受けてSDGsのキーワードや構造、概念について岩村和夫氏に執筆いただきました。

SDGsと建築家

—国際会議 JIA IPF 2019 in Hirosakiから—



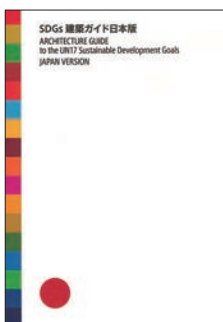
JIA フェロー
岩村和夫

1. JIA IPF (International Presidents' Forum) とは

JIA建築家大会は毎年支部の主催で開催されるが、その開会式に先んじてIPFの場が持たれ、午前中の約2時間にわたって意見が交わされる。そこではJIAと親交のある海外建築家団体の会長等が、その時々的重要なテーマに関する組織的取り組みのプレゼンと議論の主演となる。会議の外題についてはJIA本部の国際委員会(構成は文末参照)が精査し、事前に出席者とやり取りをして準備するとともに、当日会議の運営にもあたる。

筆者は、今回を含めこれまで何度か司会やモデレーターとして関わってきた。残念ながら、言語等の問題から国内からの参加者は少なく、その会議の存在自体さえあまり知られていない。

2019年は近年世界中で話題となっている「SDGs(持続可能な開発目標)」と建築家との関係性を巡って、去る10月18日に弘前で開催された。折しも、『SDGs建築ガイド日本版』(和英併記)(図1)が10月初旬にJIAから発刊された直後のことであった。



当日の発表者はアメリカ、タイ、韓国(KIRAとKIA)、スウェーデン、ARCASIA、そして日本の会長等で、熱心な議論が交わされた。本文は、筆者によるその現場でのまとめた抜粋である。

図1 『SDGs建築ガイド日本版』表紙

2-1. 外題解説

「17のSDGs」は2015年に国連が掲げた野心的かつ崇高な達成目標の声明である。そのいくつかは建築環境のデザインと直接的に関連している。また、その他は建築やランドスケープのハードウェアから間接的な影響を受けるだけの場合もある。

SDGsは極めて幅広い人間の生活領域をカバーしており、その声明の内容は必然的に一般的で曖昧である。それ故に、建築家はどのような計画をしようが、1つか2つ、

あるいはそれ以上の目標を満たせるような解釈を、常に見出すことができる。

仮に、ある目的のための一連の基準が曖昧にすぎ、したがってそれを満たすことが容易だと、その目的は本質的ではないブランド化のためだけに利用される恐れがある。しかし、SDGsは人類が直面する重大な課題に取り組み、我々がデザインの職能を通して前向きな結果や効果をもたらすことを望むような、一連の重要な価値観を指し示している。

そのためには、達成すべき目標の深い理解と、それぞれの目標の真に重要なことを成し遂げうる、我々の職能に関する創造的思考が不可欠である。

(文責：JIA国際委員会/杉山久哉、岩村和夫)

2-2. 発表者への事前の問いかけ

問1：あなたの国や地域ではSDGsに対する熱意があふれ、プランナー、建築家、デザイナー、政策立案者の間の議論や実践事例は豊富か？もしそうなら、その成功した事例について説明されたい。また、そうでない場合、それはなぜか？

問2：あなたの組織は建築家の職能団体としてSDGsの理解を広めるプログラムを提供し、建築に適用するための教育を行っているか？行っている場合、その内容はどのようなものか？

3. 国際会議の発表者



六鹿正治
JIA 会長



W.J. ベイツ
AIA 会長 (米国)



T. チラピワット
ASA 副会長 (タイ)



ソク・ジョンフン
KIRA 会長 (韓国)



カン・チュルヒン
KIA 会長 (韓国)



T. ヨクシモビッチ
SA 会長
(スウェーデン)



S.N. タンダナナンド
ARCASIA 元会長
(タイ)

4. IPF2019におけるキーワード群

各発表者からは、それぞれの国や地域の特性や、社会・文化を反映したプレゼンがあった。以下はその中から抽出したSDGsの課題や取り組みを象徴する一連のキーワード群である。

Accessible誰でも使える / Adaptive適応力のある / Affordable入手しやすい / Awareness認識 / Biodiverse生物多様性 / Clean汚染しない / Collaborative共同性 / Connected繋がりが / Creative創造的 / Cultural文化的 / Decent品格のある / Durable冗長な / Economic経済的 / Ecologicalエコロジカルな / Environmental環境的な / Equitable公平な / Healing癒し / Healthy健康な / Human人間的な / Inclusive包摂的な / Innovative革新的 / Involved参加的関わり / Low-costローコストな / Recyclingリサイクル / Regenerative再生力のある / Renewable再生可能な / Resilient復元性のある / Safe/Secure安全な / Social-responsible社会的責任 / Sustainable持続可能な / Symbiotic共生的 / Transparent透明性 / Universalユニバーサル / Upcycleアップサイクル / Vernacularバナナキュラーな / Vital生命力溢れる / Well-being福祉性 etc.

5. SDGsのトリプル・ボトムライン

以上を整理すると、そこに1997年に生まれた持続可能な企業の決算書における〈トリプル・ボトムライン(環境・経済・社会)〉の構造が現れてくる。



図2 「SDGsと建築家」のための持続可能なトリプル・ボトムライン

6. SDGsという社会的価値の変革を生み出す3つの柱

そこに含まれていない時間的な概念を、変革のプロセスとして表現すると、以下のようなステークホルダーの3層からなる3本柱の動的構造が見えてくる。SDGsはそうした概念とともにある。

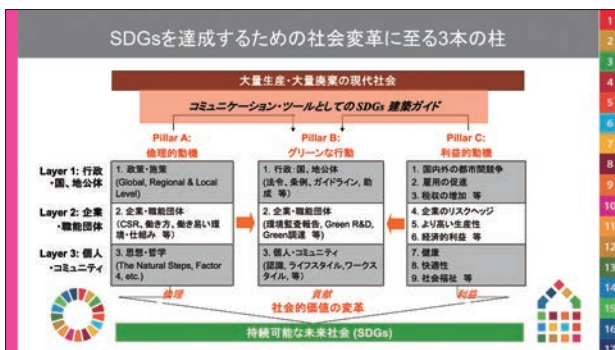


図3 SDGsの達成と社会的価値の変革 ©Kazuo IWAMURA 2019

7. フォーカスティングとバックキャスト

そして、このSDGsを達成する時間的な概念には2つの方向性がある。まず1つは〈フォーカスティング〉で、図4のように過去や現状に関する分析から、トレンドを帰納的に描く未来である。もう1つは、図5のようにまずあるべき未来 (SDGs) の姿を具体的にイメージし、一步一步現在に戻りながら目の前の問題や課題を演繹的に克服しようとするものである。これを〈バックキャスト〉と呼ぶ。

我々建築家は、計画・設計・デザインの対象が何であれ、常にこの2つの時間的な方向性を持った取り組みを生業としている。要は、そうした方法論と達成目標を認識しているか否かである。

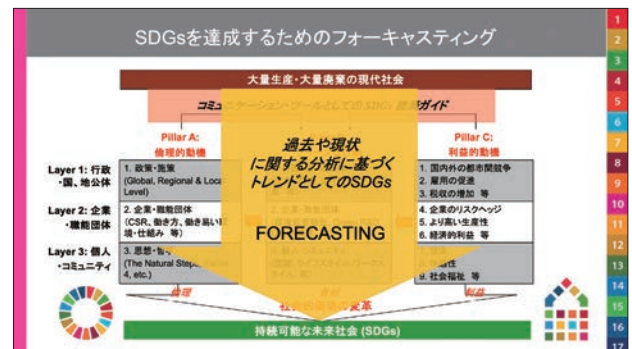


図4 フォーカスティングによるSDGsの達成 ©Kazuo IWAMURA 2019



図5 バックキャストによるSDGsの達成 ©Kazuo IWAMURA 2019

8. おわりに

発表者のプレゼン内容は、著作権の関係でここにはまだ掲載できないが、毎年のことながら興味深いものばかりであった。今年10月末にはJIAが「SDGs建築フォーラム」を開催する。そのウォームアップの意味からも、大変貴重な機会となった。今後は参加者増加等の方策をはじめ、国内における国際化を推進することが不可欠である。関係者のさらなる努力に期待したい。

■ JIA国際委員会の構成 (2019年11月現在)

- 委員長代行 : 竹馬大二
- 委員 : 藤沼 傑、戸部芳行、岩橋祐之、田口純子、
蔭山晶久、黒嶋成洋、津賀洋輔、斎藤慎一
- 国際担当理事 : 高階澄人
- アドバイザー : 岩村和夫、国広ジョージ
- オブザーバー : 杉山久哉、坂田 泉、新井今日子

東海支部会報誌『ARCHITECT』 発行継続を巡って(前編)

—発行見直しまでの経緯とその対応—



東海支部
会報委員会 委員長
中澤賢一

東海支部では支部発足以来30年間、毎月会報誌『ARCHITECT』を発行し続けてきました。その会報誌がさまざまな要因により廃刊の危機を迎え、2018年度1年間、支部全体で発行継続に関する検討を行いました。今回は『Bulletin』の誌面をお借りし、その経緯と結果、その後の展望を2回にわたってお伝えします。

東海支部会報誌『ARCHITECT』とは

『ARCHITECT』は1988年の東海支部(当時は東海北陸支部)発足当時、「会員に会の活動を広報する手段がないため、会が何をやっているのか分からない。支部機関誌の発行は緊急課題の一つである」という意見を受け、編集委員会が立ち上がり、創刊されました。以来、「出す以上は話題性をもたせ、読み捨てられずに保存されるような良いものを出す」という編集方針のもと、会員の知識向上、さまざまな情報提供、支部の活動事業報告、誌面を通しての会員交流、公的機関・教育機関への広報、賛助会の広告PRなどを目的に、会員自身で企画・執筆し、会員の顔が見える手作りの会報誌として、四県にまたがる東海支部全会員に等しくアプローチし得る唯一の媒体として、名古屋を本拠とする編集社「建築ジャーナル」の編集協力を得て、30年間発行(1988～2014年:毎月24頁、2015～2018年:毎月16頁・800部発行)を続けてきました。



また、会の活動を広く広報するべく、支部会員だけでなく、本部・他支部、東海地方の行政庁や公共図書館、教育機関など、約140カ所へ寄贈を続けています。

図1 『ARCHITECT』創刊号表紙

『ARCHITECT』の誌面構成

前述の編集方針に基づき、『ARCHITECT』は以下の企画頁で構成されていました(2018年当時)。

●『ARCHITECT』の誌面構成

表紙連載	自薦他薦により選ばれた会員が、自身でテーマを設定し、1年間連載
自作自演	会員の人となり自身で紹介する自由投稿の頁(毎月4人が投稿)
論考連載	大学教授など有識者による専門分野に関する連載
事業報告	ほぼ全ての支部・地域会事業の報告記事を参加者が執筆
法人協会通信	法人協会の企業情報・新製品の紹介など
保存情報	保存研究会員が、保存の必要性を感じる東海地方の物件を紹介(毎月2人が投稿)
本部理事会・支部役員会報告	役員以外の会員へ会の動向を伝えるために毎月掲載

ちなみに30周年記念号(2018.1月号)で『ARCHITECT』に関するアンケートを実施したところ、誌面の人気コンテンツは図2: Q6の通りでした。

『ARCHITECT』発行見直しの契機

2018年、廃刊も視野に、発行に関する見直しを検討することになりました。その要因は主に2点ですが、いずれも多くの会員から発行に対する協力を得られなくなっていることに起因しています。

予算に関する要因

『ARCHITECT』は2018年当時、毎月16頁・800部の発行で、年間支出が約440万円。この支出に対して、年2回(1月・8月)の会員による発行協力費(新年広告・暑中広告)と、法人協会広告費(毎号4社掲載)によって6割分の収入を得ていましたが、差額の4割分を会費等の他収入で補填しており、年々、支部財政を圧迫している状況でした。そこに2018年6月、建築ジャーナルから編集費用の増額を要求され、これまでと同様の予算体制では、毎月発行を継続することが困難となり、いよいよ発行継続に関する具体的な検討を行わざるを得なくなりました。

執筆協力に関する要因

会員の高齢化に伴い、年々執筆の依頼を辞退される会員が増え、誌面づくりに関して会員の協力が得られてい

Q6. 会報誌『ARCHITECT』で読んでいる記事を教えてください。(複数回答可)

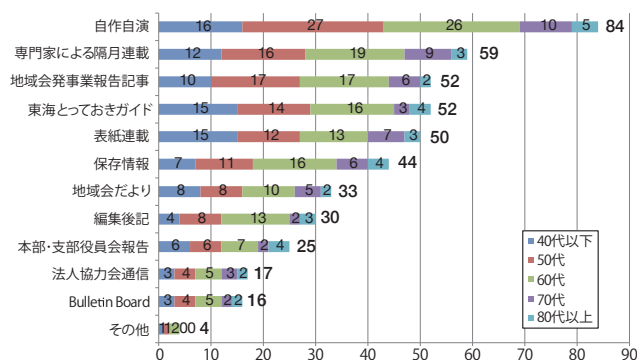


図2 30周年記念号(2018.1月)での誌面に関するアンケート結果

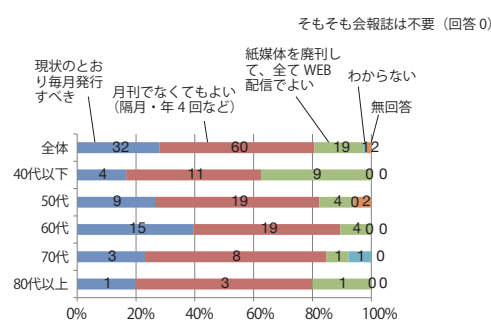
ない状況でした。特に連載から10年続く自由投稿のコーナーである「自作自演」(毎月4人執筆)においては、編集担当者(建築ジャーナル)が毎号数十人の会員へ依頼を掛け続け、ようやく4人の執筆者が確保できている状況で、編集上大きな負担となっていました(半面、先の30周年記念号のアンケート(図2:Q6)において「自作自演」が全記事中、最も読まれているという結果でした……)。その結果、執筆依頼業務の負担が年々増え続け、編集費用値上げにつながるようになったのです。

また、執筆者の確保は「自作自演」に限らず、事業報告をはじめとする他頁においても同様に困難で、限られた会員で入れ替わり執筆いただき、毎号何とか誌面を埋めている状況でした。

今回の継続検討は主に財政面がきっかけではありますが、そもそも会報誌発行は、さまざまな事業等の報告書の役割も持った、全会員へ均等に提供されるサービスであり、会の予算を一定額使用することが前提の事業であるはずで、支出額の大小でその行く末を決めていいものではないはずです。一方で、広告費収入や執筆者の減少に見られるように、会として『ARCHITECT』を会員の手で作ら上げ、継続しようという意識が低下してきているようにも感じられました。また、30年を超えて、会員・編集社ともに会報誌発行に対して甘えが生じ、誌面がパターン化し、読者(主に支部会員)に読み応えのある記事を提供できていない状況になっていたかもしれません。

これまで『ARCHITECT』は、創刊当時の崇高な理念のもと、さまざまな会員による刺激的な記事により、東海地方の建築文化向上に貢献した一媒体であったと思います。東海支部が全会員へ、平等に会の活動を広報し、時には会員の意見を自由に社会へ発信できるプラットフォームとしての媒体を30年持ち続けられたことは、大変恵まれた環境だと思います。このことを今一度、全会員で再認識し、その行く末を検討しなければいけませ

Q9. 現状、『ARCHITECT』は紙媒体の冊子を毎月発行していますが、今後のあり方についてのご意見を一つ選んでください。



んでした。

もし廃刊になるとしても、「財政の都合により止むなく廃刊になりました」で済ますことなく全会員が意識を向け、その是非について検討を重ねた上での廃刊でなければいけませんし、継続となった際は、会員が今後は積極的に投稿したいと思えるような、興味を惹く読み応えのある誌面を構成すべく、編集社も含め、大きな改革につなげられるようにしなければならぬと考えました。

『ARCHITECT』発行見直しに関する検討方法

矢田東海支部長の号令のもと、支部会員全員で『ARCHITECT』の必要性を検討し、今後の方針を決定するため、編集委員会で以下のロードマップを作成し、実行しました。

●ロードマップ

2018年6月～8月	新たな編集社を数社選定の上、見積もり。さまざまな発行形態(発行回数やWEB化、廃刊など)における予算の試算表を作成
8月～11月	アンケートおよび会員集会実施に際する情報提供として、先の試算表や『ARCHITECT』の現況や歴史、準会員・協力を会員を含むさまざまな会員の意見を伝える緊急連載を『ARCHITECT』誌上に掲載
11月	法人協力を会員を含む東海支部全会員へ、発行継続に関するアンケートを実施
2019年2月	アンケート結果を集計の上、会員集会を開催
3月～5月	会員集会の内容をもとに、支部役員会で『ARCHITECT』の新方針を検討、決定
2018年12月～2019年5月	『ARCHITECT』誌上の緊急連載で逐次進捗を掲載

ちなみに、30周年記念号で『ARCHITECT』の今後のあり方に関してアンケートも実施しており、その結果は図2:Q9の通りでした。

今回は、発行見直しまでの経緯と、その対応までの報告でした。次回(春号)は会員アンケートと会員集会の結果、その後の新方針と改革後の現況を掲載いたします。

パリの街中工事事情

— ノートルダム大聖堂の再建工事をきっかけに
改めて考える「再生され続ける街」 —



SFA Japan
荻野雄仁

2019年4月15日午後6時過ぎ、パリのノートルダム大聖堂で大規模な火災が発生し、翌日には鎮火が発表されたものの、尖塔とその周辺の屋根が崩落しました。マクロン大統領が2024年のパリ五輪に間に合うよう5年以内の再建を表明しましたが、火災の翌月末のパリへの出張の合間に、再建中の様子を確認してきましたので、その他パリの街中の工事の事情も併せてレポートさせていただきます。

ノートルダム大聖堂の火災の翌月の様子

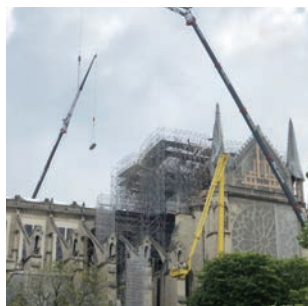
シテ島の東側に位置するノートルダム大聖堂の周辺道路は通行止めとなり封鎖されており、近づくことはできませんでした。火災前からともと修復作業が行われており、火元は工事現場だったと言われています(他に電気ショート説など諸説あり)。



工事関係者以外は立ち入りできないようになっていた



建物の周囲にはフェンスで仕切られている(写真は東側から見た現場)



クレーンによって資材だけでなく人も運搬されている。緻密な足場は火災前からあったとのこと

パリの街中工事事情

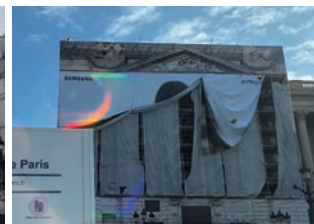
ノートルダム大聖堂も火災で再建が必要になる前から修復作業中だったことから分かる通り、パリの街中では至る所で工事が行われています。特徴的なのは、建物が描かれた建築現場シートがよく見られることで、修復中の工事現場と言えども、景観に配慮されています。ただし企業の広告スペースに使われていることもよくあります。



工事中の建物の外装を描いて景観に配慮



建物が描かれた建築現場



企業広告。朝だから中が見えている



内部がほぼスケルトン状態の改修現場



道路の補修工事の作業中



作業を終えた箇所とこれから箇所



住民のためか完全な通行止めではない



たまに見かけるエレベーター式の足場



道路の工事箇所は柵で囲われている

パリで生きる人々(と猫)

建物は古いのに、いつも新鮮な印象を与えてくれるパリ。なんと言っても、そこに住む人の活気が伝わってきます。そして気づくのです。人(や猫)も、パリという街の一部だと。



今回の滞りで目立ったキックスクーター。運用がすぐに破綻するという説もあるが果たして……。写真奥のカップルで2人乗りする姿(言うなればイタリアニック乗り?!)も多く見られた



車も普通に通る道路も子どもたちの遊び場。“The great big city's a wondrous toy”という一節がつい頭に流れる(Rogers & Hartの歌曲Manhattanより)



人だけでなく、猫も街の住人。威厳があり、やはり景観を壊すどころか、もはや街の一部

再生され続ける街パリ：

ノートルダム大聖堂についての現地の声

パリでは至る所で補修が行われ、なるべく景観や生活に支障がないように配慮されている空気感が伝わったと思います。新築ではなく圧倒的に補修が多く、常に再生されているパリの意識がよく分かる一例として、ノートルダム大聖堂の火災について、現地在住で、私の会

社SFA (Société Française d'Assainissement)のDeputy Managing DirectorであるStéphane Harelの声を紹介します。



中央がStéphane。左はCOOのArnaud Corbier、右は筆者

「悲しいことではあった

が、死者が出なかったことは奇跡的だ*。5年で再建ができるかはともかく、いずれにせよまた作っていくのだ。

これは、歴史的な建造物だらけと言っても過言ではないパリならではの、文化的遺産と共に生活する感覚と、またそれを守り修復し再建する自分たちの歴史も含めて遺産であるという意識が表れています。

*死者はなく、負傷者は火災現場で活動していた警察官2人と消防士1人の計3人。

実際に、パリの街の風景の一部ともなっているカフェの中には、300年以上も前から幾度も改修を重ねながら営業しているところもあります。

通りにはみ出したテーブルも含め、いつも驚くほど満席に近いお客さんで賑わうパリのカフェですが、なるべく多くのお客さんを収容できるよう、地上(日本で言うところの1階)部分は客席とし、トイレは地下にあるところが多いです。これを簡単に可能にするために生まれたのが排水圧送ポンプで、小型のポンプユニットから排水を細い管で重力に逆らって圧送することで、排水ピットなどの大がかりな工事をせずに新たに水まわりを設けることができます。

また、19世紀半ばに建てられたものが多い集合住居アパートマンでは、建造当時はエレベーターがなく不便なため使用人のスペースとされていた最上階に、改装で水まわりを増設する際にも排水圧送ポンプが多く採用されており、「人が居住する上で必要となる水まわりを極力建物に影響を与えずに実現する」ことに役立っています。

日本でも、すでに平等院鳳凰堂や日光東照宮などの歴史的な建造物に採用されているほか、住宅のトイレ増設や、駅や空港、スーパーやコンビニ、病院や保育園、老人ホームなどで、床かさ上げなどの大がかりな工事をせず建物へのダメージも最小限でトイレやシンクを設置するのに役立っています。

いつもパリを訪れるたびに、その歴史的な遺産の多さと身近さに圧倒されると同時に、決して「化石」というような死んでいるイメージではなく、逆に「街が生きている」印象を得るのですが、その一因は、常に再生され続けているからだという考えに今回改めて至りました。願わくば、日本の街も「生きた街」になりますように。

よしざとひろや

吉里裕也氏に聞く

都市とローカル、 人を動かす手段を考える

今回お話をうかがったのは、不動産サイト「R不動産」を運営する^{スピーカー}の吉里裕也さん。独自の視点で物件を紹介する「R不動産」は広く知られていますが、不動産仲介以外にも、新築やリノベーションの企画・設計、イベント運営、メディア発信など、建築・街・都市を軸にさまざまプロジェクトを展開しています。今回は、地域に対する取り組みやご自身の考えをお話いただきました。



— R不動産を立ち上げるまでの経緯を教えてください。

大学で建築を学び、卒業後4年半ほどデベロッパーで働きました。分譲や賃貸建物の企画・設計や土地の仕組み、現場管理などを学びましたが、いちばん大きかったのが、今でいうサービスアパートメントを立ち上げる新規プロジェクトにゼロから携わったこと。内装や家具のデザインだけでなく、家電や食器など小物類も自分たち選んで、それと並行して家賃設定やオペレーションの仕組み、予約システムづくりなどを経験しました。そして30歳くらいの時にその仕事が一区切りついたので独立しました。

独立後しばらくは1人で動いていましたが、当時一緒に動く機会の多かった馬場正尊さんとR不動産のアイデアが出て、一緒に「東京R不動産」という不動産物件を紹介するサイトを立ち上げました。

— 「東京R不動産」で扱う物件はどのような基準で選んでいるのですか。

新築・中古問わず、僕らが面白いと思う物件を紹介しています。それはスタート時からずっと変わっていません。デザインされたものよりも自分で何かしたくなるシンプルなハコ。もしくは、「天井が高い」「ルーフバルコニーがある」「桜が見える」など、特徴的な物件を集めています。創業当時はまだSNSなどはありませんでしたが、口コミで広まっていき、かなり反響がありました。

— 今ではR不動産が全国各地に広がっています。

「金沢R不動産」から始まって、今は福岡、鎌倉、房総など全国10カ所で展開しています。加えて「real local」というローカルメディアも運営していて、ローカルで暮らしている人たちがいろいろな情報を発信しています。また、地方行政と仕事をするの多い「公共R不動産」というチームもあります。

— ローカルと関わるようになったきっかけを教えてください。

東京での生活に疲れてしまったので、東京から1時間

半圏内で気持ちのいい物件を集めようというところからスタートして、2006年くらいに「リアル東京エスケープ」(通称「リラックス不動産」というサイトを作りました。その時に力を入れていたのが千葉の一宮町やいすみ市などの房総エリアで、それが後に「房総R不動産」を立ち上げるきっかけになっています。

なぜこの場所だったかという、僕がサーフィンを始めたから(笑)。このあたりに気軽に使える家が欲しいというのがきっかけでした。実際にこのエリアでいくつかプロジェクトが動き出し、会社で家を買って僕も週末はそこで過ごすようになりました。

— 二拠点居住を経験してみていかがでしたか。

二拠点居住まではいかないけれど、もう一つの居場所という感覚で利用していました。でもだんだん行かなくなり、たまに行くとも2日間草刈りで終わってしまう。で、ますます行かなくなる……。だから二拠点居住で毎週行き来するには、ルーティン化していて、行く理由がある程度強い方がいいのだろうと感じています。あとは週末行くのが心地いいペースの人もいれば、僕のように向いていない人もいます。それに気づくことができました。

他の人の生活が羨ましかったり、なんで僕は東京に住んでいるんだろうと悶々とした時期はあって、移住を考えたこともあります。でも僕の場合、例えば東京でマイナス要素になる朝のラッシュ時に移動することなんて週に1回くらいしかないし、家の前には木が茂っているから自然がないとも感じない。もっと言ってしまうと、サーフィンや登山をする時に、大阪と比べると東京の方が圧倒的に海や山が近いんです。そう考えると、僕の場合、移住したい理由は家の広さだけ。値段と広さでいうと東京は異常に高いですから、そこに対するもやもやは、正直まだあります。

— 東京から離れることに抵抗はありませんか。

ありません。ただ、東京の良さを考えた時に、例えばライブを見に行けるとか、夜出かけたくなったら何かし

らやっていたりする。そういう都市のライブ感みたいなものこそが自分が住むうえで大切だということに気づいたのです。でもそれは現状の話だから、飽きたらその時に考えればいいと思っています。

逆にいうと、そういう必要があまりない人はローカルのほうが合っているのかもしれませんが。ローカルといっても、例えば神戸なら大都市だけど自然が豊かで、家は東京の倍くらいの広さのところに住めるし、空港や新幹線へのアクセスもいい。とてもバランスが取れています。実際神戸に移住したり二拠点居住している人は、僕らのまわりに多いです。

— 空き家をサポートする取り組みもされていますね。

空き家の活用の相談が多いので、移住や多拠点居住を考えている人に、とりあえず1週間とか2週間空き家で過ごしてもらったらどうかと提案して実施したのが「トライアルステイ」というプロジェクトです。2010年からやっています。千葉県いすみ市でこれを始めたら、いろいろなところからオファーが来て、福岡や神奈川県三浦、箱根で行い、今年は大阪の豊能町で実施しています。

地域と関わるようになると、とにかく移住者を増やしたいと言われますが、隣の町から人を動かすだけでは問題は解決しません。「トライアルステイ」は現地の人と繋がったり、そこに友だちを呼んだりという関係づくりが重要で、そこに力を入れていますし、自治体にもそういう説明をしています。

— 人口が増えても解決しないということですね。

移住しただけでは移住先は潤うけど移住元は衰退する。それよりも、都市にいる人が週に1回、いや月に1回でも地方に動けば、そこで多少なりともお金の循環が生まれますよね。だから本質は移動させる手段をどう設計していくかということだと思います。そのひとつが「トライアルステイ」だし、ローカル情報を発信している「real local」も人を動かす新しいメディアにしていきたいです。

— お話をうかがうと、吉里さんが考えていることがそのまま仕事に結びついている印象です。

決して自分1人の考えではありませんが、やりたいことや気になることに取り組んでいると、それが結果として仕事になっています。ひとつ大事なことは、最終的にクライアントの利益になっているかどうかということ。

正直僕らの世代が独立した時、これは普通に仕事をしていたのでは絶対に食べていけないという感覚がありました。じゃあ食べるために、そして自分のもとの興



企画・運営を手掛けるプレオープンしたキャンプ施設「Forest Living」(いすみ市)
Photo by Shinichi Arakawa

味を満たすためにはどうすればいいのか。その時必要だったのは、クライアントが望んでいることを叶えるという当たり前のことでした。街に多くある飲食店や量販店では当たり前に行っていることが、建築の人はなかなかできていないように思います。

今クライアントが何を求めている、僕らに何を期待しているのか。普通の設計事務所ではなくて、我々にお願ひするということは何か付加価値が欲しいわけです。ですからそこはかなりこだわって意識しています。

— 最後に、建築家と社会のあり方について、今感じていることを教えてください。

僕の友人の建築家でも、結婚して子供が生まれたら生活するのが大変だから、力があるのに独立できずにいるのをたくさん見えています。そうせざるをえないのは設計料が安いからで、それは日本の社会が建築家の仕事をニーズよりもコストや経費として見ているからです。その意識を変えて、建築家の役割や価値をもっと上げていきたいですね。

僕の会社では、インターンでもただ働きは絶対にさせないと決めています。社員の給料もちゃんと払いたい。当社の設計チームのメンバーが結婚して子供が生まれて、家を買ってもまだ社員でいてくれているのはすごく嬉しいです。仕事は面白いですからね。今の仕事と生活を両立できるように、これからも努めていきたいです。

— 貴重なお話をいただき、ありがとうございました。

インタビュー：2019年11月21日 SPEAC
聞き手：長澤徹・会田友朗・望月厚司(『Bulletin』編集WG)

PROFILE

吉里 裕也 (よしざと ひろや)

株式会社スピーク代表取締役・R不動産株式会社代表取締役
京都生まれ、横浜と金沢で育ち東京へ。デベロッパー勤務を経て、2003年「東京R不動産」2004年にSPEACを立ち上げるとともに、CIA Inc./The Brand Architect Groupにて都市施設やリテールショップのブランディングを行う。建築・不動産の開発・再生のプロデュースや建築デザイン、「東京R不動産」「realocal」「toolbox」「公共R不動産」、全国のR不動産等グループサイトのディレクション、地域再生のプランニング等を行っている。共編著書に『東京R不動産』『全国のR不動産』『だから、僕らはこの働き方を選んだ』『toolbox』『2025年建築「七つの予言」』等。

30年間



彦根アンドレア

やっぱり来るんじゃないかった。このまま帰ってしまおうか……。1987年(25歳)、冷たい雨の降る11月の朝、成田空港の到着ロビーに一人ポツンと取り残された私は、不安と後悔で押しつぶされそうになっていた。東京の道路事情などまだ知らなかったから、遅れてやってきた迎えの人から「道が混んでいたの」と言われても、体のいい言い訳にしか聞こえない。ドイツ語しか話せない私と、英語でどうにかコミュニケーションをとろうとするピーエス社の人と2人、成田から永福町の社長の家まで、ただ悶々とワイパーの音を聞きながら重苦しい車中の時間を過ごした。

「アンドレア、日本に行ってみないか?」。大学卒業間際に学内で開かれたパーティー会場で「日本の企業が費用を出してくれる。1年間、素晴らしいじゃないか」と言われた。「ニホン? 冗談でしょ、どこにあるのかも知らないのに」。でも1年くらい外国を経験するのも将来のためにはいいかもしれない、という思いがあったのは確か。本当は引込み思案でヨーロッパから離れるのが怖くてたまらなかつたけれど、決心して飛行機に乗った。

1989年に再び日本に来た時、磯崎新アトリエに入って、「また日本に来ました」とピーエスに挨拶に行った。平山社長は私の負けん気の強さを気に入ったのか、大いに歓迎してくれた。代々木のショールームの改装を依頼された。私たちの間には信頼関係が生まれ、それが後に、JIAの環境建築賞の最優秀賞、そして今年のJIAの25年賞を受賞したIDIC(岩手暖房インフォメーションセンター)一連のプロジェクトに結びついた。

まだ日本語も満足に話せなかった私と平山社長は言葉で深くやりとりしたわけではない。ただ、「人間らしい最高の生き方を人々に伝えたい」という彼の思いには深く共感できた。当時は日本でピーエスのように「設備と建築は一体になって室内気候をつくるべき」という考え方は珍しかったと思う。そして私は自分がイメージする建築と自然との共生を素直に形にし、できる範囲で最適だと思ったことを具現化させただけ。それが「サステナブル」かどうかなど考えもしなかった。私にとっては「当たり前のこと」だった。断熱、遮蔽、自然エネルギー利用。それは

技術的に難しいことではないことをもっと知ってもらいたい。27年後の今、IDICはそこで働く人、訪れる人に愛され、竣工時よりもさらに生き生きと美しくなっている。

30年間日本でずっと気持ちいい家づくりに取り組んできた。そのためには建物中の表面温度、断熱と蓄熱は、光、風通し、間取り、空間と同じく当たり前で大切。特別にエネルギーのことについて考えてはいなかった。美しく、長持ちし、愛される建築を作りたい。

そんな中、2011年3月11日の東日本大震災、福島原発事故。チェルノブイリの雨を南ドイツで受けていた私にとって、もう一度意識が変わる出来事であった。私の子供たちには日本で住み続けたいと言われ、ドイツの家族と友達には直ちに帰ってきてと言われた。日本に残ることを決意し、子供たちにちゃんとした未来を残すために私はなにができるのか考えた。

生まれ育った南ドイツは、「2000 Watt 社会」に向かっていろいろな方向から未来のため、エネルギーとライフスタイルについて取り組んでいることがわかった。とてもおもしろくて、楽しくて、わかりやすい。そして同時にすばらしい建築がこの地域には多い。「ああ、両方可能なんだ」と思った。エネルギーフレンドリーと美しい建築を両立させた社会はできる。それを多くの人に見せるため毎年EAツアーを自分で開催している。

最近Architects for future [Voice of under 30]というプラットフォームを立ち上げた。30歳以下の若い世代の人が建築、気候、社会に対しての未来を語る場を提供する。彼らの先輩世代はサポーターと仲間になり、そしてそこから私のようにチャンスをもらって新しい社会、建築、未来に関する夢が現実になることを願っている。



「Voice of under 30」若い世代が建築、気候、未来に対して語るプラットフォーム。先輩世代は夢を現実にするサポートができるプラットフォーム。

抱負を語る

「極小」から
住宅・都市を考える

笠井誉仁



大手ハウスメーカーが邸宅仕様のモデルハウスを構える住宅展示場の近くの狭小敷地 (36㎡) に自宅を設計し、2018年、設計事務所兼モデルハウスとして開業しました。

都市部の戸建て敷地は、敷地面積最低限度が条例等で定められていれば、最低面積ごとに分割。定められていなければ、極限まで小さく刻まれる傾向にあります。我が家も、もとは1軒の宅地を3分割した敷地の1つ。ひと昔前なら2分割し狭小住宅を建てるような規模の土地です。なぜ2でなく3で割ったか売主に聞くと、3分割の方が儲かるからと。近年、都市部では、共同住宅が超高層化する一方、戸建住宅は超極小化の流れが加速しています。

住宅が極小化すると次第に階段比率が高まり、その究極の姿が名作「塔の家」(建築面積11.8㎡)です。我が家(建築面積21㎡)も「塔の家」と同じスパイラル階段、各階一部屋、床が間仕切りのコンパクトハウスとなりました。壁掛けTVの下から冷蔵庫の上に廻り込む階段、リビングダイニングテーブル、打ち合わせスペースを兼ねた玄関等、極小で考えた空間や周辺環境との関係は、広い家や非住宅にも応用できると思っています。

JIAには2019年入会し、渋谷地域会に所属しました。月1度会議を行い、その後皆で飲みに行くのが楽しく、先輩方から学ぶこともたくさんあります。今後もJIAのさまざまな活動や交流を通じてスキルアップし、質の高い街並みづくりに貢献できればと思います。よろしくお願ひします。



CRAM HAUS 2階LDK

(撮影：建築写真ニシデ)

抱負を語る

絵を描くように

長谷川拓也



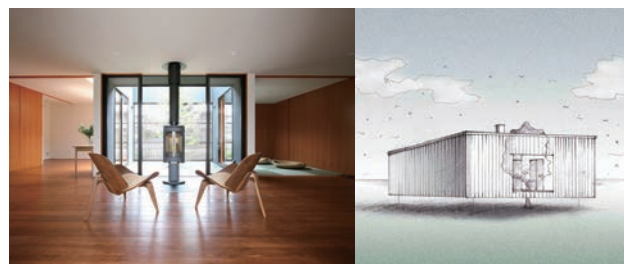
人とうまく関わるのが、幼い頃から苦手だった。自分を表現することで人との関わりに意味を感じられるようになったのは、高校で油絵を描き始めてからである。絵画や造作への興味と喜びがそのまま仕事にできる道として「図面を描く＝建築設計」を選んだことは私にとってごく自然なことだった。それに学生時代のバイトでコンペの模型を作り続けていた頃、建築は総合芸術であるという心酔があった。

しかし、「図面を描く」ことはツールのほんの一部であり、コミュニケーションの中で自分のデザインの想いを実現化していく能力こそが建築設計という仕事に不可欠であることに就職後の仕事を通じて気づき、自分の能力では至らないことを痛感していった。

独立後はCADパースの制作を通してデザイナーやコピーライター、カメラマンなどさまざまな文化人とコラボレートしたり、講師として学生との関わりを持つなど、多くの人と関わる機会を持ったことで建築的な技術以上に必要な表現力を鍛えることができた。

さらに、社会全体が電子化に変化する中、建築も鉛筆手描き図面からペンタブレットアニメーションまで進化してきた。そんな中、ツールを駆使し、特性を見極めながらプレゼン方法を変えていく楽しみも見出してきた。

建築は根本に人間の生活があり、構造、断熱、コスト、施工方法などクリアしなければならない条件があるが、関わる人々の力を借りながら、今あらためて新しい絵筆をもって「絵を描くように」新しい建築をつくりたい意欲に駆られている。



中庭の家

コンセプトスケッチ

地域会の活動を通して まちづくりの問題点を探る



建築・まちづくり
委員会
林 美樹

JIA 杉並土曜学校の活動

JIAに入会してから私の基盤は杉並地域会であり、その活動の中心として杉並土曜学校を2008年から続けている。土曜学校は年4回、一般にも参加者を募り、座学や見学会などで建築や地域の問題を体験し、共に考える場となっている。今までには年間テーマとして、地域を知る、地域にある建築を読み解く、空き家問題を深めるなど、さまざまな切り口で企画してきたが、今年度は「杉並らしい、未来のまちの姿を考える」とし、正面から「これからのまちづくり」について考えることになった。

阿佐ヶ谷北東地区のまちづくり計画

自らが暮らす地域で地区計画が進んでいるが、その内容に疑問を感じるという一人のメンバーからの意見が発端となり、JR阿佐ヶ谷駅の北東にあたる区域で現在進行中の問題を取り上げることになる。小学校や総合病院、そして立派な屋敷林が今も残るが、この見慣れた風景が大きく変わろうとしていることに困惑しているというのだ。この地区の計画は数年前から検討されてきており、2019年3月には「阿佐ヶ谷駅北東地区まちづくり計画」が策定され、現在は「地区計画」の手法により実現のためのルール作りが進められている。

この問題を取り上げることに対しては、地域会のメンバー間でも多様な意見があり、時として軋轢が生じた。ここまで計画が進んでいる段階で、JIAという建築家集団としてどのようなことができるのか。土曜学校で取り上げることは決めたものの、どこを目指せばいいのか？

不毛な住民説明会そして土曜学校開催

土曜学校の開催ひと月前に、近隣住民向けの地区計画についての説明会があったので参加してみた。異様な空気であった。区の担当者の説明の後、非常に激しい口調で、計画の内容についてというよりは「お上が勝手にやっている、けしからん」という周辺住民の怒りだけだった。

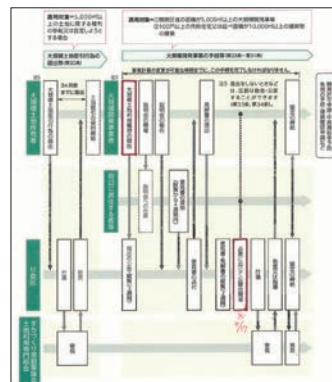
土曜学校では、区のまちづくり担当部長(国交省から来ている気鋭の30代)に計画の概要を話してもらったうえで、野沢正光さんと杉並地域会からは寺尾信子さんがそれぞれの観点からまちづくりや今回の計画について話

をした。今回は計画の是非を議論するのではなく、問題点をあぶり出すのが目的であるということをも前提に議論を進めた。会場には屋敷林の所有者の代理人も来ており、地主の地域への思いや苦勞などについて生の声が聞けたのは良かったと思う。

余談だが、その後「阿佐ヶ谷駅北東地区土地区画整理事業」の公聴会が開かれた。質問者は9名、うち計画を好意的に捉えている人が4名、反対意見を述べた人が5名。計画に対して好意的な発言をしたのは、商工会、近隣の神社の宮司等、それに対して「反対です!」とはっきり意見したのは一般人だった。小学校の体育館に集まった傍聴者も反対の方が圧倒的に多いのは、ヤジの飛ばし方でわかる。しかし、区民が意見を述べ、区役所の担当者は「聴く」だけの一方通行のものであった。また、その後予定されていた景観審議会は開かれなかった。区からは「当該土地利用構想がまちづくり基本方針等に即していると判断し、開催しない」といった連絡が入る。即していると判断するのは誰なのか質問をしてみたところ、担当部署であり、最終的には区長であるとの回答。

なにかが足りないことは確かである、と思った。それはひとりで言う区民との対話であり協働だと思う。区民と行政が「争う」構図となっており、双方とも言いっぱなし。反対意見を述べるだけではなく、計画やルール作りにも参画できる仕組みこそ、今必要であると確信した。

今年度の土曜学校最終回は2020年2月8日。「市民と考えるまちづくり」というタイトルで私がコーディネーターを務めることになっている。



2019年度土曜学校第1回フライヤー 大規模開発事業の手続き(杉並区資料より)

ノマディック・ルーフを港湾緑地へ

—構想から完成まで—

2019年6月7日～16日に、横浜・象の鼻テラスで開催された「フューチャー・スケープ・プロジェクト」。これに、JIA神奈川の若手建築家を中心となり、ロフト付可動式テント「ノマディック・ルーフ」を出展しました。その取り組みについて、3回にわたってお伝えしています。



JIA 神奈川
若手建築家
+ 法人協力会
プロジェクトリーダー
小山将史

今回は、第2章として「ノマディック・ルーフ」完成までの経緯をお話したいと思います。

スタートは昨年1月でした。まずはJIA神奈川の若手建築家でチームを組みました。メンバーは山口賢、清水智津子、山下祐平、井上玄、私の5名でスタートしました。

半年と期間も短いため、象の鼻パークにあったら良いと思うものは何か、単純に考えてみました。せっかくの海岸なのに、海に近いところに日除げがないことに気づき、東屋のようなスペースがあったら良いという話になりました。一方で、象の鼻パークは港湾緑地でもあるので、固定せずに建築化できる方法も必要でした。そこで、移動可能な大屋根をつくることになりました。

そんな中、たまたま、私が大学3年生の時に、内藤廣さんの授業で「ノマディック・シェルター」という課題があり、その時に作った案が今回活用できるのではと思い、チームと役員会で提案したところ、賛同いただいたので、この案をベースに具体化を進めました。

それから急いで図面化し、ざっと試算すると、数百万円はかかることがわかりました。実は今回の一番の問題は予算がないこと。本当にゼロからのスタートです。そこで、まずはJIA神奈川の法人協力会の方々をはじめ、今回の案に対して賛同してくれそうな企業の方々に、支援を求める活動をしました。途中、調整はかなり大変でしたが(涙)、皆さんに快くご対応いただき、何とか予算も目処が付ききました。足りない分は、時間的に準備不足ながらクラウドファンディングにも挑戦し、有志の方々より多くのご支援をいただくことができました。

予算調整と並行して役所協議も発生しました。展示物ではなく仮設建築物ではないかという指摘もありましたが、ノマディック・ルーフの大きさを調整して許可申請不要の範囲となり、法的な問題はクリアしました。



ノマディック・ルーフ施工の様子

あとはよいよ制作です。実は、予算調整と役所協議の関係で、施工をスタートできたのが展示1～2週間前



というタイトな日程となってしまうりましたが、それでも、皆さんの迅速かつ正確な制作により、何とか無事に間に合い、展示前日に建て方を行うことができました。

そして、6月7日から10日間の展示が始まりました。会期中、さまざまな方々にノマディック・ルーフを見ていただき、一般の方々には日本建築家協会の存在を知っていただく機会になったと思います。

今回、チームの誰一人欠けても完成しなかったプロジェクトだったので、完成した時は、安堵というより、ご協力いただいた皆さんへの感謝の気持ちでいっぱい、目頭が熱くなったのを今でも覚えています。その感謝の気持ちも込めて、このプロジェクトにご賛同いただき、ご協力いただいた当会法人協力会の有志の方々と協賛団体・協賛企業の方々をご紹介します。本当にありがとうございました！

●本プロジェクトにご協力いただいた皆さま ※五十音順(敬称略)
社名と協力・提供いただいた内容をご紹介します。

(JIA神奈川の法人協力会有志の皆さま)

- ◎石井造園：盆栽、コーヒー販売、園芸相談会、クラウドファンディング特典「盆栽ワークショップ」
- ◎エフワンエヌ：解体作業、当日対応等
- ◎江間忠木材：ノマディック・ルーフのロフトの材料
- ◎カンディハウス：当日対応等
- ◎キクシマ：ノマディック・ルーフの金物
- ◎協進印刷：クラウドファンディングへのアドバイス、PRパネル製作等
- ◎高島屋スペースクリエイツ：協力先の紹介、当日対応等
- ◎DNライティング：ノマディック・ルーフの照明
- ◎時久商事：ノマディック・ルーフのウエイト
- ◎ピアレックス・テクノロジーズ：光触媒コートと当日対応等
- ◎星通商：協力先の紹介

(協賛団体・協賛企業)

- ◎えねこや：えねこや屋台の貸し出し
- ◎菊池建設：ノマディック・ルーフの本体施工
- ◎太陽工業：ノマディック・ルーフのテント幕生地(縫製はクイックスエンジニアリング)
- ◎ナイス：ノマディック・ルーフの構造木材
- ◎富士：机と椅子を貸し出し
- ◎フレームワークス：構造設計
- ◎麺屋翔：クラウドファンディング特典「炊き出しラーメン」

魅力ある地域の遺産

—目黒区エリアの景観・歴史・環境遺産—

2015年開催の第24回保存問題東京大会時に、東京14地域会の協力のもと「未来へ継承したい環境・景観・建造物・建築物」をテーマにまとめ、大会シンポジウムで各地域会から発表されました。その時の資料をベースに「未来へ継承したい風景」として連載しています。



目黒地域会
木村丈夫

目黒地域会では2008年の会発足以来、年に2回程度、一般の方を交えてまち歩きを行い、地域内の魅力ある建物や界隈を記録してきました。ここに掲載するのは、2015年の保存問題東京大会用に選んだもので、どれも魅力ある地域の遺産であり継承したいものです。

旧前田侯爵邸本邸・和館

国指定重要文化財

設計：塚本靖（東大教授）、高橋禎太郎（宮内省内匠寮）／1929（昭和4）年

加賀前田家16代当主前田利為の本邸。利為が外国からの賓客を迎える本格的邸宅を目指して建てた。昭和初期の建築であるが、西欧の大邸宅様式を日本に再現した数少ない事例。敷地環境を含め貴重な文化遺産である。



旧前田侯爵邸本邸・和館

日本民藝館本館・西館（旧柳宗悦邸）

本館1936（昭和11）年、西館1935（昭和10）年

柳宗悦が陶芸家の濱田庄司や河合寛次郎らと「民藝」運動を興したのが1925年。駒場に自宅を建て運動の拠点となる日本民藝館の開設を目指した。旧柳宗悦邸（西館）は、栃木県から移築した明治初期の長屋門と柳の設計による母屋からなる。道を隔てた本館は民藝運動の本拠として建てられた。



日本民藝館本館・西館

目黒区庁舎

設計：村野藤吾／1966（昭和41）年

旧千代田生命本社を区が買い取り、耐震補強ののち庁舎として再利用。建築家村野藤吾が残した職人的なデザイン意匠を尊重し、区役所として機能するために必要な模様替えは、安井建築設計事務所によって慎重に行われている。先代が残した建築遺産を大切に使い続けている模範例。



目黒区庁舎

大塚文庫

設計：大江宏／1989（平成元）年

大塚正夫の個人コレクションの美術工芸品を収蔵展示するために私邸の敷地内に建築した美術館。現在は貸しギャラリーとして利用されている。コンクリート造ではあるが、随所に和風の趣のデザインがみられる。特に2階から上っていく3畳間の「富士見亭」は外観上の特色にもなっている。



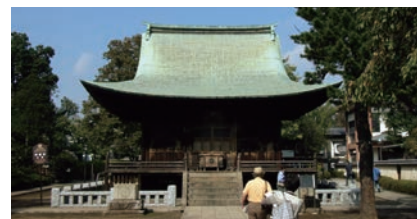
大塚文庫

天台宗経王山文殊院円融寺釈迦堂

国指定重要文化財

室町中期（1400年前後）

唐様+和洋で、単層入母屋造り、屋根は銅板葺き。木割の繊細さは鎌倉円覚寺に通ずる優雅な建物。釈迦堂は国指定重要文化財で、東村山市正福寺地藏堂（国宝指定）に次ぐ都内で二番目に古い木造建築物。



天台宗経王山文殊院円融寺釈迦堂

目黒不動尊(泰叡山瀧泉寺)

808年創建。五色不動、江戸三大不動として有名。江戸期には、江戸の三富(富くじ販売)で庶民に親しまれた。858年から枯れることのない湧水「独鈷の瀧」がある。枯れたことのない湧水が、災害時の拠点として活躍する可能性がある。



目黒不動尊

駒沢オリンピック公園総合運動場

会場設計：高山英華、芦原義信、村田政真 他／1964(昭和39)年

総合運動場。陸上競技場—RC、体育館、屋内球技場—RC・鉄骨造。国民体育大会の会場として利用されていた運動場を、施設を整え第18回オリンピック第二会場として使用された。日本建築学会賞特別賞受賞。その後総合運動場として諸機能を充実させ、現在も広く都民に利用され、親しまれている。



駒沢オリンピック公園総合運動場

自由が丘界限

目黒区南部に位置し、自由が丘駅には東急東横線と大井町線が乗り入れている。高級住宅街と駅周辺を中心とする商業施設が程よい距離感で共存し、休みの日には多くの人々が訪れ、毎年住みたい街ランキングにも選ばれる。大型商業施設や幹線道路などがなく、楽しい歩行空間が形成されている。



自由が丘界限

目黒インテリアストリート

目黒通りは、白金高輪から世田谷等々力を経て、多摩川を越え川崎横浜へ至る幹線道路。1990年代以降、大鳥神社から環七あたりにかけて自然発生的にインテリアショップがオープンし、「目黒インテリアストリート」と呼ばれるようになった。休日は歩きながらショップめぐりをする人でにぎわっている。



目黒インテリアストリート

林試の森公園

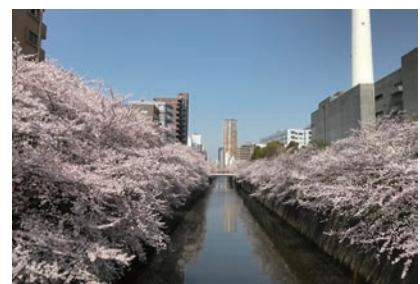
1990年から、4つの広場(1,700～5,900㎡)、デイキャンプ場、ジャブジャブ池、芝生広場、冒険広場などを整備。大部分の樹木は林業試験場時代からのもの。都内屈指の樹木の種類と数(高木6,100本)を誇る。都内のオアシスとして親しまれ、既存公共施設の再生活用の好例。



林試の森公園

目黒川沿い桜並木

昭和50年代、洪水防止の目的で川底を切り下げ、コンクリート護岸工事が行われ、同時に両岸に桜の木が植えられた。目黒川と色とりどりの橋、見事な桜並木、歩行者中心の道と個性的な飲食店や小売り店が醸し出す、大資本の介在しない自然発生的でヒューマンスケールな街並みとして、目黒区が誇るエリアの1つである。



目黒川沿い桜並木

目黒区は、緑が多く住みやすいという理由で住宅が増え続けていますが、街に緑を提供してくれていた住宅の庭が消え、敷地いっぱいに建つ狭小住宅の街並みが激増していて、大通りよりも住宅街の狭小住宅の緑化を促進する必要性を痛感しています。

これまでのまち歩きの記録は小冊子『いい緑のある住みたい街をつくろうまち歩き』にまとめられていますので、ご希望の方に配布いたします。

築地・銀座周辺まち歩き（後編）

建築家写真倶楽部の皆さんにご協力をいただきながら「写真」「建築写真」について連載しています。最終回の今号では、築地・銀座周辺まち歩きの後編、銀座で撮影した写真を紹介します。

7月5日、建築家写真倶楽部のメンバーでカメラ片手に東京・築地と銀座周辺を歩きました。築地周辺の様子は前号（『Bulletin』2019秋号（281号））でお伝えしましたので、今回は後編の銀座です。

建築家写真倶楽部にとって、銀座は思い入れのある場所です。発足して間もない2002年のアーキテクツガーデンでは、建築家写真倶楽部主催で、即日写真コンクール「銀座を撮る」を行いました。参加者は35mm ネガカラーフィルム1本を受け取り銀座をテーマに撮影。その日のうちにハガキサイズにプリントし、その中から自分でエントリー作品を提出。投票で人気ベスト5を選ぶ

まち歩き参加者：兼松紘一郎、秋山信行、大澤秀雄、藤本幸充、野中 茂

というものでした。会場には147枚の写真が整然と展示され、大いに盛り上がりました。写真倶楽部顧問を務めてくださっていた村井修さん、林昌二さん、メンバーでもあった吉村行雄さんも選定員としてご参加くださり、ギャラリートークも行いました。

その後の銀座ライオンで行った懇親会の案内板に「建築家初心倶楽部の皆様」と書かれていて、また盛り上がったのも懐かしいエピソードのひとつです。

それから早いもので16年。久しぶりに銀座の街を歩きました。写真とともに撮影者のコメントを掲載します。

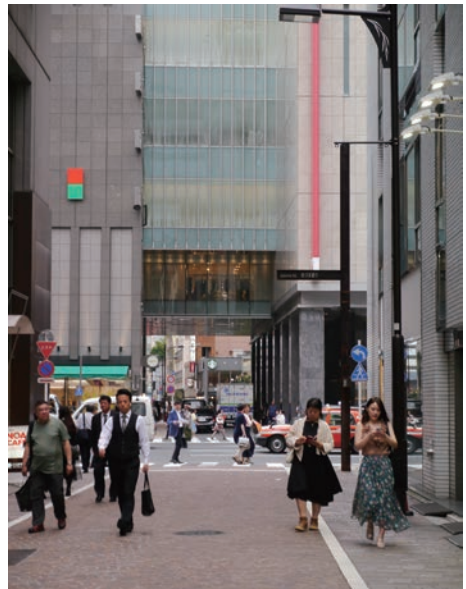


■銀座四丁目交差点（2002年10月27日撮影）
2002年のアーキテクツガーデンでのイベント「銀座を撮る」の時に撮影。林昌二賞に選んでいただいた思い出の1枚。（秋山）



■GINZA PLACE
上の銀座四丁目交差点の写真の左の白い壁が日産ギャラリーです。3年ほど前に建物が建て替えられ、ギャラリーが「NISSAN CROSSING」となり、その間に、日本を代表するこの企業にも大きな変化がありました。（野中・秋山）

■あつま通りから銀座三越を見る
大きなビルの間を通り抜けて、車と人が行き交うこれも銀座。（兼松）



■金春湯
（金春ビル・銀座の銭湯）
銀座通りから一筋入った金春通り、昔は謔本・能専門の本屋さん「わんや書店」がありました。（野中・秋山）



■銀座・久兵衛 高級寿司ビル

この金春通り辺りに、お蕎麦屋さん「よし田」があったと記憶しているのですが、どこに行ってしまったのでしょうか。(野中・秋山)



■石張りの電話ボックス

誰がお金を出したのだらうと気になりました。電話をかける人は仕上げなど気にしていないと思います。(野中)



■銀座八丁目

夕暮れ迫る八丁目、至福の時間が訪れるが我は無念！（兼松）



■銀座の路地1

街歩きの楽しさは路地巡りにあり。(大澤)



■銀座の路地2 (三原小路)

お稲荷さんの祠があります。路地の奥に見える、厚切りのフグ刺しを出す老舗「治郎長」。木質系の建物が銀座に残っているのは、歌舞伎座斜め前の足袋の大野屋とこの建物くらいかしら。不思議な世界です。それが銀座らしいところです。(野中・秋山)



■日暮れ後の銀座

やがて大通りを跨ぐ至福の時が来る。(兼松)



■銀座ライオン

とても活況で楽しい空間でした。海老フライがおいしかったのが、やけに印象深いです。(野中)



■サッポロピヤホールにて

街歩きの後の楽しみはコレ！兼松さん、長年お疲れさまでした。(大澤)

交流委員会 Eグループ

時代の節目



交流委員会
法人協力Eグループ
代表幹事
きんでん
若佐明継

私たち交流委員会Eグループは、電気設備工事に関わる工事会社・メーカーにて組織され活動を行っています。

2019年は、平成の天皇陛下のご退位により、皇太子殿下が新しい天皇陛下にご即位され、5月に年号も令和に変わり新しい時代への幕開けとなりました。また、ラグビーワールドカップなど、さまざまなスポーツイベントで日本中が盛り上がり、東京オリンピック・パラリンピックが迫ってきたことを実感できるようになってきました。

今年はいよいよ東京でオリンピックが開催されます。オリンピックはさまざまなスポーツイベントの中で競技施設の設備(照明照度等)のグレードが一番高い仕様になっています。今回の東京オリンピックは、長いオリンピックの歴史を通じてLED照明が本格的に競技施設に導入される初めての大会で、いろいろな実証実験を重ねながら、新国立競技場やその他の競技施設も完成を迎えています。

一方で、昨年は地球温暖化に起因したと思われる酷暑と、連続して発生した大型の台風による自然災害により、西日本のみならず東日本にも風による災害や洪水など、甚大な被害をもたらす年でもありました。

大型台風の上陸が多い西日本の地域では、自主的に鉄塔や電柱などの耐風基準を風速50～60メートル(国の耐風基準は40メートル)に引き上げていますが、東日本は従来の国の耐風基準で鉄塔等が建っており、今の送電設備では、昨今の異常気象に耐えるのが難しい状況になってきています。



昨年7月に開催した「納涼屋形船施設見学会」の時の夜景(屋形船上から撮影)。お台場から東京湾周辺のライトアップを鑑賞する、毎年恒例の見学会です。

それに輪をかけたリスクが送電設備の老朽化で、新設・更新を行ってはきましたが、主力の送電設備は、前回の1964年の東京オリンピックを起点に全国で整備されていたため、50年あまり経過しています。その間、国からの指示を受け、各電力会社が約28万9千基の鉄塔等をチェックしてはいますが、すべてを把握できている状況とは考えにくいのが現状です。

送電設備は山間部などに張り巡らされているため、街中の配電設備に比べてメンテナンスなどの更新費用が高く、電気料金への大きな負担がかかります。それに加え、災害などの有事の時以外は頻繁に送電線の仕事があるわけではなく、昨今の働き方改革などの時代背景もあり、熟練作業員の減少による作業員の確保が難しくなっています。

さらに、今年4月には発送電分離による電力・ガスの完全自由化がスタートしますので、電力会社としても難しい問題を解決できないのが現状のようです。

2019年もいろいろなことがありましたが、露呈したさまざまな問題を日本国民の知恵を結集し、1964年の前回の東京オリンピックが日本にとっての時代の節目だったように、今年の東京オリンピックを契機に新しい未来に向けて社会インフラなどの社会構造を大きく変えていかなくてはいけないのではないかと思います。

建築業界に携わる人間として今後のJIAの活動を通じて少しでも力になればと考えています。



「納涼屋形船施設見学会」の参加者集合写真。正会員や他グループの方も交えて毎年大変盛況です。

交流委員会 Gグループ

意匠設計事務所の
BIM活用事例の見学

交流委員会
法人協力 Gグループ
代表幹事
建築ピボット
井出哲也

交流委員会Gグループ(CAD、情報処理、教育、出版)は、情報開発部と合同で活動しており、毎月1回の勉強会を開催しています。2019年10月の勉強会は、BIMソフトを活用されているアーキトン建築設計事務所をお訪ねして、代表の脇守様より「意匠設計事務所のBIM活用事例紹介」というテーマでお話をお聞きしました。当日は情報開発部会、Gグループ以外からも参加者があり、11名での見学会となりました。

BIMとは、Building Information Modelingの略で、コンピューター上に、3次元の建物モデルを作成し、材料やそのコストなどの属性を与え、建築の設計、施工から維持管理など、あらゆる工程で情報活用を行うためのシステムです。

見学会では、まず脇様にBIMソフトを実際に操作していただき説明をお聞きしました。3次元空間に通り芯を配置して、柱、梁、壁、建具、パラペットなどを入力していく一覧の操作を見せていただきました。配置した柱や梁は、断面サイズなどの属性を一括で編集することが可能です。窓の入力は引き違い、FIXなどのタイプを選択してサイズを入力して配置します。階段も蹴上げ、踏み面などの条件を設定して一括で入力できます。断面マネージャーを利用して、どこでも選んだ場所の断面図を作成できます。外装などに材料の情報を与え3次元で確認することができ、設計の初期段階で材料の検討が可能です。

続いて実際に設計された建物を例に説明していただきました。BIMソフトは主にパースによるプレゼンテーションに活用し、図面作成は別のCADソフトを利用、2つのソフトを使い分けて設計を進めたそうです。BIMソフトでは、パースの他に、基本設計段階での各階平面図、立面図、天井伏図、建具キープラン、建具表を作成しています。実施設計図は2次元CADで作成し、カラー印刷をして確認申請にも利用されています。

BIMソフトで起伏のある敷地を、測量データをもとにメッシュに高さ情報を与えて3次元モデルを作成した例や、照明器具の配置を3次元で検討した例を紹介していただきました。また、スマートフォンを利用したVR

(Virtual Reality)も体験させていただきました(レンズが2つ付いた紙製の箱にスマートフォンを取り付けた専用の簡易VRゴーグルを使用)。室内パースは仕上げ材料と照明器具などの光の設定とカメラの設定をしてレンダリングします。中程度の画質で10～20分でパースが完成します。最高画質だとレンダリングに時間がかかることもあるのでハードウェアは最上位機種を使用されています。現在は設計が決まってからのプレゼンテーションでBIMソフトを使用して、設計初期の検討は別のCADソフトで行っているそうですが、慣れれば、初期段階からBIMソフトでの検討ができると思うとのことでした。

BIMソフトを導入したのは2年ほど前で、操作方法はマニュアルを見て独学で習得し、講習会などには参加されていないとお聞きし、驚きとともに感心いたしました。BIMソフトはこれまで使っていたCADソフトより手間がかからずパースが作成でき、3次元での検討やタブレット端末を利用したプレゼンテーションにも大変有効で、BIMソフトを導入したことにとっても満足しているとのことでした。今後は、日影、天空率などの法規との連携や、BIMソフトで作成したデータを実施設計で活用していくことが課題とおっしゃっていました。

今回は少人数の設計事務所ですら実際にBIMを活用されている方のお話をうかがい、大変有意義な勉強会となりました。BIMの普及と活用方法については、いろいろところで理想像が語られていますが、まずは使う人の目的に合わせたBIM活用が良いのではないかと感じました。

勉強会終了後はワインを味わいながら、さらなる情報交換をして親睦を深めました。アーキトン建築設計事務所代表の脇守様に心より感謝いたします。



見学会の様子

わたしの愛用ツール



建設現場やオフィスで、皆さんはどんなツールを使っていますか？「わたしの愛用ツール」では、皆さんが普段仕事で使っている愛用品やマストアイテム、人に薦めたい便利なツールなどを紹介します。今回は、設計時に欠かせない「眼鏡」「芯ホルダー」と、スマホで使える「地図アプリ」を紹介していただきました。

100円眼鏡

大倉富美雄



愛用している100円眼鏡

視力は建築家にとって根本的に必要な機能。で、100円ショップの眼鏡を！でも、「これ、愛用ツール？」と思う会員もいるかもしれない。それは判るので、すまない気持ちも……。

だが、だんだん「そうだ」と思い始めた。何しろメガネは必ずといってよいほど無くしてきた（苦渋の笑い）。検査して買った高級眼鏡でも、気が付くところにもない。でもこのメガネなら適当な数だけ買って、パソコンの前、会議テーブルの上、ベッドサイドなど、どこにも置いておける。

何しろ、100円でよくここまでできるものだと大感心。ケースも付いている。もちろん、素材・技術の向上、営業戦略が可能にしたはずで、すぐ壊れるが、それは扱い次第。値段が4桁以上の眼鏡との差は……？

美人の先生に「あなたの視力なら100円眼鏡でいいです」と言われ、もっぱらこれになってしまった。

（大倉富美雄デザイン事務所）

カランダッシュ CARAN D'ACHE の FIXPENCIL

棚橋廣夫



カランダッシュのホルダーとトゥルーポイントの芯削り、交換用のヤスリカップもある

今から五十数年前、スウェーデンの設計事務所働いていた頃のこと、アアルトと同級生だというフィンランド人の所長と若いスウェーデン人と私の3人がアーキテクトで、あとは十数名のエンジニアがいた。スウェーデンの設計事務所は職能がはっきりしており、計画の立案、デザインはアーキテクトの仕事で、実施設計に相当する部分はエンジニアの領域となっていた。当然CADもない時代、アーキテクトは製図版にT定規を置き、トレペにスケッチなどを描いていた。この時使用していたのがカランダッシュのホルダーで、芯の太さでいくつかの番手に分かっている。エンジニアからは「どうせアーキテクトは太い鉛筆しか持たないから……」などと揶揄されていた（ディテールなんか描けないだろうという意味）。

以来この方、このホルダーを愛用している。77番は絶妙な重量バランスで、これにBの芯を入れ、タイプ用紙の原図に細太濃淡自在の線が引ける。

（エーディーネットワーク建築研究所）

アプリ 「大江戸今昔めぐり」

佐々伸子



まち歩きが好きだ。建築現場に出掛ける折々に、ブラっと周辺を探索する。ブラ○モリではないが、まち並みに突如現れる崖地や坂道に遭遇すると、江戸時代にはどんな様子だったのだろう、などと妄想を膨らませてワクワクしてしまう。

そんな時に役に立つのが「大江戸今昔めぐり」という地図アプリ。現代の東京23区全域を網羅した江戸末期の復元古地図と、現代地図を、スマートフォン上で正確に重ねて表示することができる。

地図の透過度が変わえられるので、今と昔を簡単に見比べることができ、史跡や寺社、橋、名所などのスポット情報も豊富だ。大名の名前や役職名、石高まで詳細に記載してあり、池波正太郎などの時代小説好きにはたまらない。

敷地の下見の際にもオススメだ。川の埋め立てなどは大まかに把握できるので、心の準備ができる。

（ヒロ空間企画）

大阪通天閣のおひぎ元にある不思議な空間

「ひといき、いかがですか」などと言われると、そのまま仕事を辞めてしまいそうな年齢になりました。とは言っても、若いスタッフと張り合って、やせ我慢の毎日を過ごしております。この「張り合う」ことがこの歳になると大変で、つついエネルギーを大量消費してしまいます。

そんな時、心を癒し、励ましてくれるのが音楽です。もちろんライブが良いのですが、CDでも十分満足することができます。CDをより良い環境で聞けるように、さまざまな工夫を30年もしてきました。

その工夫のひとつが、良いCDの制作者を探し出すことです。この探し出す中で、途轍もない音楽レーベルを大阪・新世界で発見しました。その名は「澤野工房」。100年の歴史を持つ「履物屋」でありながら、ヨーロッパの無名ピアニストの中から才能を探し出し、CDを製作しています。宣伝をしない、ストーリーミング、ダウンロード販売はしない、フィジカルメディアのみという徹底した方針で、世界のジャズ好きを席卷してきました。一見乱暴そうなコンセプトですが、作品はどれも丁寧にプロデュースされた、私たちファンが求める本物ばかりです。

新世界市場の入り口にあるお店を訪ねると、古風な雰囲気のお店の中でとても上品な雰囲気の奥さんが草履を包装している



左が澤野さん、右が私です。憧れの人に会えて緊張しています。

最中、同じ空間の中で尊敬する主、澤野由明さんが私のために、最新作の中からお気に入りのピアニストのジャケットを一生懸命探してくれます。不思議な感覚です。伝統の履物と洗練されたセンスのCDコレクション。世界で注目の音楽レーベルが、大阪・通天閣のおひぎ元の履物屋の一角に鎮座している光景は、私にとって驚くべきことでした。

澤野さんは私と同じ1950年生まれ、ひといき中の私の目前でキラキラ回転しています。澤野さんに負けずにもう少し頑張ります。
(松本金弥)

2020年の目標

編集後記

- ひとつひとつの課題にじっくりと取り組む時間をつくる。(会田)
- JIA以外のことにも時間を割きたい。(中澤)
- オリンピックが終わったら次は北歐ツアーです！(関本)
- 自宅兼事務所がもうすぐオープン。オンオフスイッチ切替できるか、スイッチなんてそもそも無いのか実験します。(長澤)
- 時間に流されず、計画を立てて実行する、仕事も健康も。(望月)

編集 : 公益社団法人 日本建築家協会
 関東甲信越支部 広報委員会
 委員長 : 市村宏文
 副委員長 : 中澤克秀
 委員 : 長澤 徹・会田友朗・古谷俊一・吉田 満・望月厚司・小林哲也・関本竜太
 編集長 : 長澤 徹
 副編集長 : 会田友朗
 編集ワーキングメンバー : 広報委員+中山 薫・有泉絵美・清水裕子・八田雅章・立石博巳
 編集・制作 : 南風舎

Bulletin 282 2020 冬号
 発行日 : 令和2年1月15日
 発行人 : 浅尾 悦子
 発行所 : 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA 館
 Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294
 印刷 : 株式会社 協進印刷
 ■ JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧
 ・ (公社) 日本建築家協会 (JIA) <http://www.jia.or.jp/>
 ・ JIA 関東甲信越支部 <http://www.jia-kanto.org/>

■ 定価 300円+税/会員の購読料は会費に含まれています。

© 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2020

PROFESSIONAL FIT by HIGANO

PRO-FIT®

GATE

プロ・フィット ゲート



支柱回転式コンパクト開戸 福田美術館(京都府) 設計: 安田アトリエ

SHADE

美しい渡り廊下
プロ・フィット シェード



シェード 港湾技能研修センター(神戸) (兵庫県) 設計: 梓設計

INTERIOR RAIN

プロ・フィット
インテリア
傘立て



ウォールイン傘立て C11タイプ 高松市新病院(香川県)
設計: 山下設計/森勝一建築事務所



スタッキング傘立て E1Sタイプ 軽井沢千住博美術館(長野県)
設計: 西沢立衛建築設計事務所

●プロ・フィット カタログをご請求ください ●ホームページでプロ・フィット WEBカタログをご覧ください



ヒガノ株式会社

本社・工場
〒340-0002 埼玉県草加市青柳3-24-7
Tel 048-931-3321 Fax 048-931-7332
e-mail: info@higano.co.jp

東京営業所
〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-1-9
ヒガノ日本橋ビル
Tel 03-5623-3889 Fax 03-3662-7778



[詳しくはヒガノHP]

プロ・フィット製品がオールラインナップ www.higano.co.jp